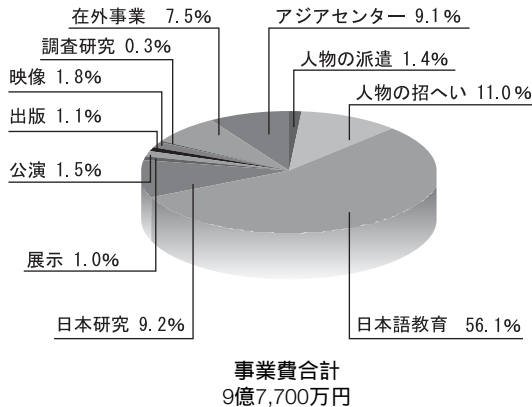


地域別報告

東アジア

概要



東アジアにおける事業実績額は9億7,700万円であり、国別では、中国と韓国の実績が大きい。中国は5億5,500万円ですべて第3位、韓国は3億5,500万円ですべて第6位である。また、分野別では、従来に引き続き日本語教育および日本研究の比率が高く、55.6%と全体の半分以上を占める。

韓国については、双方向性・共同作業の重視、日本文化の体系的・深層的理解の促進、共通課題への取り組みなどに重点をおいて事業を実施した。「日本文化レクチャーシリーズ」は、日本のグラフィックデザインや、ロボットテクノロジーによる産業創生と社会貢献を取り上げ、ソウルのほか地方都市に巡回した。シネマテーク釜山との協力による映画上映会は、日本映画を体験する場として定着しつつある。また、「日韓言論人ワークショップ」「日韓舞台共同制作」「日中韓NPOワークショップ」等、多様な分野における対話と共同作業を支援した。日本国内では、アジア現代美術個展シリーズとして、韓国女性作家イ・ブル氏の作品展を東京、岡山で開催した。

中国では、知的対話事業として、「21世紀のアジアを考える日中研究者フォーラム」の最終会合を開催、3年にわたる対話の成果が『日中関係をどう構築するか』（毛里和子・張蘊嶺編、2004年3月、岩波書店）として公刊された。写真展「日本の美を撮る」や日本映画講演会の実施など、伝統と現代のバランスのとれた日本文化紹介と地方都市への巡回にも努めた。北京日本文化センター開設から10年を迎えたのを機に、訪日フェローOBによる懇談会を開催した。また、基金が長年にわたり運営を支援している北京日本学術研究センターは、日本政府の無償資金協力による新施設に移転して、教育・研究活動の更なる充実に努めた。とくに

情報リソースの公開に取り組む図書資料館では、中国各地の図書館関係者の参加を得て「日本語文献リソースの整理と利用」ワークショップを開催した。

海外事務所報告

韓国

ソウル日本文化センター

1. 概況

2003年の韓国は盧武鉉(ノ・ムヒョン)政権の誕生で幕をあげた。前年12月に行なわれた大統領選挙では国民の選挙行動に大きな変化がおき、前職大統領より22才も若い盧武鉉氏が選出された。

急速なスピードで市民社会化する韓国を象徴するとも見えたこの政権は、発足直後から「アマチュア政治」との批判を受け、大統領の支持率が急降下し、韓国社会の解析の難しさを露わにした。ワールドカップ共催、しかもベスト4進出を達成した2002年の上昇機運は、2003年に入り長期的経済停滞、労働争議多発、米軍基地問題、不正政治資金問題などにより一転して冷却した。そして2004年3月には国会において大統領弾劾という非常事態を迎えることになった。

このような政治状況の中で、これまでの韓国と根本的に違った点は、上記のような政治的動揺にも拘わらず、市民生活はきわめて安定し、一見して平穩無事な様相を保持し続けたことである。IT化が全国を席卷し、都市においては外国文化を含めた催しの数も大幅に増え、社会的雰囲気も変容した。前政権時代には国民的悲願であった南北統一に対しても、消極的な意見が大きく台頭するなど、なににつけても新旧が相克する様相を見せた。

国全体としては必ずしも順風満帆ではない状況のなかで、いわゆる「韓流」と称される韓国発のポップカルチャーがアジアを覆い、このような自信感を背景に、長年制限されてきた日本文化に対する門が2003年末には大幅に開放された。しかも、これにより日本文化が突如大量に流入するということもなく、成熟した社会状況を如実に反映した点は注目に値し、今後の日韓関係のあり方を示唆するところが多い。



Yes Yoko Ono展

2. 日本との文化交流事業

2003年は、前年の日韓共催ワールドカップによる社会全体の盛り上がり一段落し、また、日韓国民交流年が終了したこともあり、日本との交流事業については、いわば「通常の年に戻った」ということができる。その一方で、2001年に起こったいわゆる「教科書問題」や「靖国参拝問題」によって凍結されていた日本文化開放に向けての動きが再開された年でもあった。

韓国にとって最も近い隣国である日本との交流が、「ワールドカップ以前」と比べてより身近で自然なものになった理由としては韓国社会の市民社会化が一段と進み、市民の関心と価値観の多様化が進んだことによって、日本への関心が「生活」「食文化」「ファッション」など、より個別的なものに移行してきたということが挙げられる。日本側で映画やアイドル歌手をきっかけとして、「韓国」が一種のブームになりつつあった状況と比較すると、韓国における日本への関心は、むしろ静かに、しかし着実な広がりをもって浸透していったということができる。

日本文化開放の動きとしては、盧武鉉大統領が2003年6月に訪日した際に発表された日韓首脳共同声明において、「文化交流を活発化させるため、韓国は日本大衆文化開放を拡大する」との文言が謳われ、9月および12月に第4次開放が決定された(実施は2004年1月)。また同時に共同声明では、2005年を日韓国交正常化40周年と位置付け「日韓友情年2005」として、両国の各界各層の間における交流を進め、さらなる相互理解と友情を増進する機会とすることも合わせて発表された。

3. ソウル日本文化センターの活動

<活動方針>

ソウル日本文化センターが正式に開設して2年目となる2003年は、韓国国内において事業を実施する場合に重要となる各分野の専門機関・専門家などとのネットワーク作りに重点を置いた。また、一般公募事業においてより多くの良質な申請を得るためにも、センターの存在と活動内容を韓国国内に広報することに配慮して事業を実施した。とくに2002年の日韓国民交流年を契機として飛躍的に拡大したさまざまな分野の日韓交流の momentum を維持するためにも、センターの在外事業として実施している助成事業を有効に活用し、日韓間でとくに対話が必要と思われる分野の交流事業を支援した。

<2003年度事業例>

●「Yes Yoko Ono展」(2003年6月～9月、ソウル)

オノ・ヨーコ氏の約40年間にわたる芸術活動を紹介する大規模回顧展として開催された。展示期間には6万2,200名の観客が入場したが、これは同時期に開催されたピカソ展(サムソン美術館主催)の入場者数を上回る記録であり、現代美術の展示会としてはきわめて異例のこととして、美術専門誌をはじめ日刊紙やTVなど各種メディアにて多数紹介されるなど、各界の注目を集めた。2004年4月から6月まで東京で巡回展が開催された。

●「日本映画回顧展」(2003年3月、ソウル)

2002年(11月～12月)東京で開催された「韓国映画：栄光の1960年代」の交流事業として、国際交流基金、東京国立近代美術館フィルムセンター、韓国映像資料院の共催で開催された。日本映画の黄金期ともいえる1950年代に活躍した巨匠監督15人の15作品を中心に上映を行ない、合わせて日本映画専門家による「日本映画フォーラム」も特別イベントとして開催された。上映会中には4,631人の観客動員を記録したが、これはソウルで開催される日本映画上映会の平均入場者数を上回る記録である。

●「田中一光ポスター展」(2003年8月～9月、ソウル)

戦後日本のグラフィック・デザインを本格的に紹介する企画の第一弾として、田中一光氏のポスター展を開催した。「産経観世能」「日本舞踊」をはじめ、タイポグラフィなど同氏の主要作品52点を展示した。また、日本のグラフィック・デザイン全体についての理解を深めるため、武蔵野美術大学教授柏木博氏による講演会とデザイン図書展をあわせて開催した。会期中には計3,607名が入場したが、類似する展覧会がほぼ皆無の韓国において本展は時宜を得た企画となり、大きな注目を集めることとなった。



日本映画回顧展



田中一光ポスター展



●国際学術大会「日本学研究方法の再照明」(2003年7月、ソウル)

「韓国日本学連合会」(韓国における中心的な日本研究学会である韓国日本学会が、韓国日本語学会などほかの四つの学会と共に結成)が開催した初めての国際学術大会で、約400人の日韓の学者が参加(発表者は130人)し、日本学研究の新しい方向を模索するための討論を行なった。「体系的な日本学研究のために初めて行なわれた統合的な学術行事」という内容で新聞などマスメディアでも数多く報道された。

中国

北京日本文化センター

1. 概況

2003年3月の全人代で正式に胡錦濤主席、温家宝首相体制がスタートしたが、新体制はその直後からSARSという大きな試練に直面した。広州、香港で広がったSARSは2003年4月には首都北京を襲い、4月末～5月初めにかけては北京の街がゴーストタウン化する異常事態となった。SARS禍による経済への打撃が懸念されたが、2003年後半にはほぼ回復し、沿海部を中心に引き続き高度成長を続けている。

対外関係でも経済優先の現実的な対外戦略をとっており、東南アジアやインドとの接近など多国間外交を意識した戦略に切り替えつつある。胡主席がフランスでのG8サミットに招かれるなど中国は着実に国際社会での存在感を増しており、また2004年2月に行なわれた北朝鮮をめぐる6か国協議ではホスト国として重要な役割を果たした。

日本との関係では、年間を通じ懸案となる事件が続き、日中関係は決して安定しているとはいえない一年となった。2003年は日中平和友好条約締結25周年にあたったが、前年の日中国交正常化30周年「日本年」「中国年」に比較すると若干盛り上がりには欠けた感否めない。

経済的ゆとりを持ってきた都市の一般大衆の間では、家計に対して教育や娯楽、余暇の費用が占める割合がますます増加している。都市部では連休に国内旅行を楽しみ、ローンを組んでマイカーを購入する中流階級層が増えてきている。一方、沿海都市部と内陸部の農村との経済格差は開く一方であり、「三農問題」(農業・農村・農民の問題)はますます深刻な問題となっている。

2. 日本との文化交流事業

2003年前半はSARSの影響により予定されていた文化交流事業はことごとく中止となったが、そのぶん秋以降に文化行事が集中した。とくに9～11月は、前進座「天平の甕」北京・揚州公演、松山バレエ団「白鳥の湖」北京・上海公演(いずれも基金海外公演助成事業)など、前年にくらべ数は少ないものの、日本の一流の芸術を紹介する公演が相次いだ。また、裏千家、池坊、日本音楽情報センターなど中国内に常駐して日本文化普及活動を行なっている民間グループも着実な活動を続けている。政治的な事件に影響を受けやすい面もある文化交流事業であるが、事業



日本映画講演会

の成果を一過性のものとすることなく、継続的な相互理解、交流の拡大にどのように結びつけていくかが今後の大きな課題となるであろう。

3. 北京日本文化センターの活動

< 活動方針 >

・中国の知的指導者、若手リーダーの知的交流支援

中国国内の欧米志向が強まるなかで、従来から日本につながるのがある日本研究者や日本専門家に加え、これまで日本に対する関心の低かった欧米研究者、国際関係研究者などに対象を広げ、日中間及びアジア多国間の知的交流を支援する。また、研究者のみならず実務家、NPO関係者などさまざまな専門分野でリーダーとなりうる人物の知的ネットワークを広げる。

・知日層のコアとしての日本研究者育成と情報ネットワークづくり

高度な日本語能力を備え人文・社会科学の諸分野で専門性を広げていく日本研究者の育成も重要な課題である。基金が長年にわたり運営を支援している北京日本学研究中心(p.50参照)は、2003年9月より日本ODAによる新施設に移行し、図書資料など中国全国に対する日本研究の情報発信機能をますます充実させていくことが期待される。また日本研究拠点機関として支援してきた南開大学日本研究中心は2003年4月に日本研究院に昇格し、中国内の日本研究の発展にさらなる貢献が期待される。

・多様なニーズをふまえた日本語教育の支援

日本語教育アドバイザーが中心となり、北京市内を拠点として研修会の実施などを通じ中等日本語教育に対する支援強化に取り組むとともに、大学などの高等教育機関の日本語教育ネットワークを支援する。また東北地方で中等日本語教育支援に取り組む青年日本語教師を側面的にサポートする。

・顔のみえる等身大の日本紹介

若年層を主要な対象とし、日本映画講演会および上映会、写真展「日本の美を撮る」の実施などを通じて若者が親しみを感じる魅力的な現代文化・伝統文化を紹介する。

・地方主要都市における事業展開

総領事館と連携し、文化紹介派遣や巡回展など、地方主要都市での事業を積極的に推進する。

< 2003年度事業例 >

・日本映画講演会および上映会(2003年11月19日～20日、中国国際文化交流中心/北京)

中国国際文化交流中心との共催で、明治学院大学教授四方田犬彦氏による日本映画についての講演会を行なった。講演会に

先立ち、『キッズ・リターン』『シコぶんじゃった』の2作品の上映会を行なった。北京市内の映画関係者や日本語を学習する学生などを中心に200名を超える聴衆が集まった。講演後の質疑応答でも講師に対して専門的な質問が続き、日本映画やアニメに対する関心の高さがうかがわれた。また当地の雑誌『当代電影』『当代電視』にて本事業の特集が組まれた。体系的に日本映画について学習する機会がなかったため、本事業は日本映画についての理解を深める好機となったとの反応が多かった。本事業は上海、瀋陽、ウランバートルで巡回講演が行なわれた。

・写真展「日本の美を撮る」(2003年12月12日～21日、陝西省図書館展覧館/西安)

中国国際文化交流中心、陝西省中日文化交流中心との共催により、写真展「日本の美を撮る」を西安にて開催した。展覧会場が文京地区の一角にある図書館内という、アクセスが容易な好条件の位置にあったため会期中1万3,500人もの入場者があり、大きな反響があった。当初、本事業開催前に発生した西北大学事件の影響がやや心配されたが、共催機関の適切な広報と実施体制により大きな影響を受けることなく成功裏に事業が終了した。本展は、長春(11月3日～10日、長春中日友好会館)、合肥(11月25日～12月3日、合肥亜明美術館)で巡回展示を行なった。

・中等日本語教師セミナー(2004年2月4日～6日、武漢外国語学校/武漢、2月11日～13日、北京日本文化センター/北京)

センター日本語教育アドバイザーと中国課程教材研究所との共催により、中学高校の日本語教師対象の研修会を行なった。武漢外国語学校の協力により、はじめての中国南部での開催となった武漢セミナーでは、華東・華中・華南地域の8省2直轄市より25名の中等日本語教師が参加し密度の濃い研修会となった。北京市セミナーは華北地域を対象に41名の日本語教師が参加した。センターに日本語教育アドバイザーが着任して以来5年となり、中国の中等レベル日本語教育支援の活動が年々裾野を広げ、定着・発展してきていることが伺える活発なセミナーとなった。



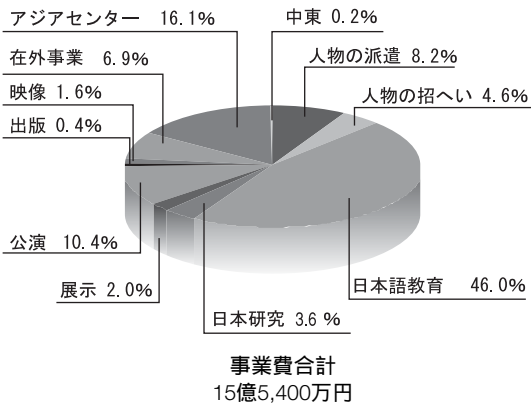
巡回展日本の美を撮る



中等日本語教師セミナー

東南アジア

概要



東南アジアにおける事業実績額は約15億5,400万円であった。

2003年は、日本ASEAN首脳会議において合意した「日本ASEAN交流年2003」として、政治、経済、社会、教育、文化等さまざまな分野で、年間を通じて多くの交流が行なわれた。基金は「文化交流を通じた日本とASEAN地域の一体感の醸成」に向けて150件あまりの事業を実施した。

「J-ASEAN POPsコンサート」は、日本とASEANの若者がポップスを通じて相互理解を深める機会として、クアラルンプール、ジャカルタ、バンコク、横浜で計1万4,000人を動員した。そのほか「アジア漫画展」「表層を越えて：ものづくりにおける日本スタイル展」「Painting for Joy：90年代の日本絵画展」等の巡回展示を行なった。タイ英字紙『ネーション』のレビュー記事は、2003年における日本の文化交流事業が活発であったことを紹介し、「他の外国文化機関も日本のリードに触発されてしかるべき」と述べた。マレーシア・アクターズスタジオ芸術監督の招へい、劇場スタッフ養成ワークショップなど、今後の交流拡大につながり得る人材育成と共同作業にも努めた。

東南アジア各国文化の日本への紹介、各国と日本の多国籍間交流も継続的に実施している。日本国内で「東南アジア現代美術展」「東南アジア映画祭2003」「アジア in comic：アジア女流漫画の世界展」、開高健記念アジア作家講演会シリーズ「カンボジア女性作家パル・ヴァンナリーレ講演会」を開催したほか、知的交流についてはアジア・リーダーシップ・フェロープログラム、東南アジア研究地域交流プログラム(SEASREP)などを実施した。

事業実績額の半分以上を占める日本語教育では、教師研修の実施、教材開発への協力などのほか、教員相互の情報

交換やネットワーク形成の機会をつくるなど、地方を視野にいたした支援を行なっている。日本研究については、タイ・タマサート大学における「アジア諸国の日本研究に関する地域会議」「インドネシア日本研究機関代表者会議」などを支援した。基金が長年にわたり支援し、東南アジアで唯一、日本研究の博士号を授与するインドネシア大学大学院日本地域研究科では、初めての経営学博士を輩出した。

海外事務所報告

タイ

バンコク日本文化センター

1. 概況

2001年総選挙により、議会における圧倒的多数を得たタクシン首相率いるタイ愛国党は、その後2003年3月には連立の枠組みを変更しつつ、議会における勢力を365議席(73%)まで伸ばし、それを背景にトップダウン型の政策を推進している。

こういった状況のなか、2003年10月には、APEC(Asia-Pacific Economy Cooperation)首脳会議がバンコクのチャオプラヤ河畔の国際会議場において行なわれ、経済問題やテロ対策・安全保障問題などが議論され、首脳宣言として貿易・投資の自由化促進、人間の安全保障の強化などが採択された。

経済面では、アジア経済危機の後、内需刺激策や生産拡大が経済の堅調な成長をもたらし、外面的には中止していたビル建設工事の再開や中心地サイアム駅北側の大規模工事など活況を呈している。

文化面では、タイ観光庁が昨年「2003年バンコク国際映画祭」に引き続き、「2004年バンコク国際映画祭」を開催し、150以上の作品が5か所の会場で上映され、大きな話題となった。

文化・教育関係行政のトピックとしては、2003年7月に組織改革に係る新法が公布され、これにより旧教育省、大学庁、国家教育委員会が合併され新教育省となった。中央行政局では、主に全体の方針や戦略策定、地方行政区の支援などを行ない、各地方行政区では中央の方針に沿った教育行政が実施されることとなった。

2. 日本との文化交流事業

2003年度における日本とタイとの文化交流事業における最大のトピックは、2003年日本ASEAN交流年である。タイにおいて開催された日本ASEAN交流年認定事業は74件(外務省調べ)、う



JASEAN POPs
有里知花とプライオニー(日・タイ イメージソング歌手)



J-ASEAN POPsバンコク公演

ち12件の文化交流事業はバンコク日本文化センターが主催または共催したものであった。12件の事業は、いずれもタイテレビ局の取材を受け、「質の高い文化交流事業を実施する国際交流基金」を印象付けた。

大型舞台公演は、エイジアン・ファンタジー・オーケストラ・ツアー2003(6月)、オペラシアターこんにゃく座アジアツアー2003「ゼロ弾きのゴージュ」公演(7月)、ダムタイプ「メモランダム」バンコク公演(9月)、J-ASEAN POPsバンコク公演(10月)、水と油「見えない男」公演(11月)というように、連続して実施することでメディアの協力により、高い観客動員率を得られ、広報上の相乗効果が高かった。

今後の日本文化紹介・芸術交流事業において基金が果たす役割は、当地の舞台芸術関係事業の成熟度から考えれば、ますます大型化していくと予測されるが、周年事業実施年度における基金の役割も、単独主催または共催型から、「他機関との連携」型に変化していくものと思われ、プロデューサー的役割よりも、コーディネーター的な役割がより期待され、日本側団体とタイ側団体をマッチメイクしていく業務が主流となると考えられる。

3. バンコク日本文化センターの活動

<活動方針>

タイの国際・国内・文化関係にみられる動きのうち、ASEAN加盟国間の結束の強化および北東アジアとの有機的連携、地方分権化の推進と教育制度の改革、「タイらしさ」を追求した新しい文化活動と伝統文化の見直し、ならびにバンコク日本文化センターのこれまでの活動実績をふまえ、以下の活動をした。

- ・センターの各事業の存在感を増し、日・タイおよび日・インドシナ地域の文化交流の中核機関としての存在を内外にアピールするために、ホームページ機能の強化など情報発信力を高める。
- ・地域としての取組みが要請される課題に対し、日・タイおよび日・インドシナ地域が対処していくことを知識層から草の根レベルにまで積極的に支援する。とくに、インターメディアリー機能として、日・タイの文化交流の情報提供・活動に対する協力、政府関係機関やNGOによる社会貢献活動に対する協力、知的交流事業を促進する観点や地方展開も考慮した。日本研究分野では、従来の双方向的な形態の事業を支援するとともに、地域研究との連携を推進した。
- ・日・タイおよび日・インドシナ地域の芸術家ネットワークを構築していく前段階として、タイ国内の芸術活動を支援した。とくに、センター施設であるアート・ギャラリーやホールを

一層オープンにし、先駆的な芸術交流事業への支援、国際交流基金フェロー経験者の滞日成果発表の機会提供、日・タイのコラボレーション事業を実施した。

- ・本部事業の地方展開など地方・近隣国との連携に留意した事業を実施した。
- ・日本語事業においては、中等教育機関などに対する支援を引き続き行なうとともに、最近活発化しつつある現地の日本語教師会の活動を支援した。

<2003年度事業例>

・J-ASEAN POPsバンコク公演(2003年10月26日)

日本ASEAN交流年2003年記念事業として、「J-ASEAN POPs Concert Thailand 2003公演」を、国際交流基金とGMMグラミー社の共催のもと、在タイ日本大使館の協力、タイ航空等の協賛を得て、インパクトアリーナにて開催した。日本から有里知花(イメージソング歌手)、ジャニーズJr.、新田昌弘(三味線奏者)が、タイからブライオニー(タイ版イメージソング歌手)ほか多数の人気アーティストが参加し、約7,000人の観客が集まる盛況となった(敬称略)。

・中等教育機関(後期)学習者向け日本語教科書『あきこと友だち』制作出版

2000年度よりタイ国内の高等教育機関、中等教育機関教員およびセンター講師らによる執筆委員会によって制作が進められてきた日本語教科書『あきこと友だち』が完成した。この教科書はタイの中等教育機関後期課程3年間で1週間に6コマの授業があるコースを対象に開発されており、6分冊の本冊、ワークブック、教師用指導書、テープで構成されている。各学年の前期分にあたる奇数巻の市販が2004年3月から開始され、店頭販売されることとなった。

・タマサートおよびチュラロンコン大学日本研究修士課程合同セミナー(2004年3月24日)

タイの有力大学であるタマサート大学およびチュラロンコン大学は、早くから日本研究に取り組み、それぞれ1997年、1999年に日本研究修士課程を開設した。両大学院修士課程修了者は各界で活躍しているが、今回、同課程修了者および関係者を集めた日本研究セミナーがタマサート大学において開催され、当センターより経費を助成した。セミナーでは、両大学の主要な日本研究者が顔をあわせ、タイにおける日本研究の歴史を振り返った後、個別の研究発表、また今後の日本研究のあり方についての議論が行なわれた。本セミナーは初めての試みであり、今後も継続して実施することで両大学研究者の今後の関係作りに資するものと期待される。



日本語教科書『あきこと友だち』



合同セミナー

インドネシア

ジャカルタ日本文化センター

1. 概況

国内の治安面では、2002年10月にバリ島で発生した爆弾テロ事件に引き続き、2003年8月には12人の死者を出す爆弾テロがジャカルタの米国資本系の高級ホテルで発生した。その直後、複数のビルなどに対して爆弾予告事件が多数発生し、センターが入居しているビルにも数回爆弾予告があった。一方、地方の情勢に目を向けると、インドネシア政府と独立派組織「アチェ自由運動」(略称GAM)との和平協議が不調に終わり、5月にはナングル・アチェ・ダルサラーム州に軍事非常事態宣言が発令され、国軍による自由アチェ運動(GAM)に対する統合作戦が開始された。この戦闘により、自由アチェ運動側、国軍兵士や警察官、多くの市民が犠牲になるなど、依然として国内の治安情勢は不安定な状況であった。

社会面では、2004年7月5日に実施予定のインドネシア史上初の正副大統領直接選挙の前哨戦として、4月5日の投票日に向けて、国会議員/地方議員総選挙キャンペーンが3月11日より各地で繰り広げられることとなった。

国際関係においては、10月に第9回東南アジア諸国連合(ASEAN)首脳会議がバリなどで開催され、安保共同体、経済共同体、社会・文化共同体の3つの共同体設立を柱とする「ASEAN協和宣言II」を採択し、2020年を目処にASEAN共同体の建設という目標に向け、行動計画の建て直しを行なった。

2. 日本との文化交流事業

2003年は日本ASEAN交流年ということで、年間を通して各種文化交流事業が実施されたが、7月にはその一環として、ジャカルタを中心に「日本インドネシア友好祭」が開催された。2002年9月に官民合同の「日本ASEAN交流年・インドネシア年間実行委員会」が設置され、この実行委員会が中心となり、合計30以上の公演、展覧会、映画上映会、市民交流事業、フェスティバル、弁論大会、スポーツ交流事業、各種セミナーやシンポジウム等が実施された。

ジャカルタ以外の地方都市をみると、例えば、東ジャワ州スラバヤ市においては、同市と姉妹都市関係にある高知市との市民レベルでの交流を深めるために、「第1回スラバヤ・よさこい祭り」が開催された。

欧米諸国と比較すると当地における市民レベルでの文化交流

は未だ盛んであるとは言えないが、姉妹都市関係を結んでいる州・都市を中心に、市民レベルでの文化交流活動が徐々に増えてきているといえよう。

3. ジャカルタ日本文化センターの活動

<活動方針>

- ・「日本ASEAN交流年2003」に関する取り組み
- ・一般市民への文化情報発信の強化

広報媒体を通じてセンターの更なるプレゼンス強化、年間約3万人の来館者を誇るセンター図書館のサービス充実、「スクールビジット」事業の積極的な展開を図った。

- ・日本研究、知的対話支援における対象分野の拡大

各種「文化人講演会」の開催、イスラム系大学における日本文化紹介事業の積極的な展開、日本研究振興の一環として、当地の高等教育機関における日本研究センター間の連携強化に取り組んだ。

- ・現地文化振興事業

現地側が主体となつて行なう日本文化理解促進のための各種事業に対する支援、また、現地文化振興事業に対する支援を行なった。とくに、プリティッシュ・カウンシル等の外国文化機関と連携して現地の若手芸術家や知識人を支援した。

<2003年度事業例>

- ・「日本インドネシア友好祭」(2003年7月1日~31日、ジャカルタ)

当友好祭期間中、センターは、日本語弁論大会一般の部全国大会、生花展、日本インドネシア児童画展、日本映画週間、第5回/第6回アジア漫画展合同展、じゃかるた新聞杯国際囲碁大会、「つるとかめ」津軽三味線コンサート、オペラシアターこんにゃく座公演等の多様な事業を実施した。

「つるとかめ」津軽三味線コンサートにおいては、津軽三味線奏者の澤田勝秋氏、民謡歌手木津茂理氏率いる「つるとかめ」と、ムラコ島の伝統音楽をベースに現代的なアレンジを加えて海外でも評価の高い、当地の現代音楽グループ「ニュー・インドネシア・アンサンブル」とのジョイントコンサートを実施し、友好祭の締めイベントとしての位置付けもあり、インドネシア社会のみならず在留邦人からも大好評であった。

オペラシアターこんにゃく座公演は文化庁アーツ・プラン21の助成等を受け、センターが現地のコーディネートをこなすという協力体制のもと実施した。こんにゃく座の公演は当地では2回目であったこともあり、前評判も高く、連日9割の観客動員があり好評であった。

● J-ASEAN POPsジャカルタ公演(2003年10月22日、ジャカルタ・コンベンション・センター)

日本からはThe BOOM、高野寛、INSPi、有里知花、インドネシアからは、ダンドゥット界のスーパースターであるイヌル・ダラティスタ、今回のプロジェクトで横浜公演にも招待されたAB Threeが出演し(敬称略)、会場のジャカルタ・コンベンション・センター・プレナリー・ホールは満員の約4,000名の観客で埋め尽くされ、暑い熱気に包まれた中で無事終了することができた。コンサートの模様は当地マスメディアでも好意的に取り上げられ、観客からも好評であった。後日インドネシア国営放送にて、コンサート内容のテレビ放送が行なわれた。コンサート実施前に各種メディアと連携した関連事業を実施、当地のFM放送局で“Tokyo Beat”の放送を行ない、インドネシアのリスナーに対してJPOPsの浸透を図った。

● 2004年新カリキュラム準拠普通高校 / 宗教高校用日本語教科書作成プロジェクト(2003年4月1日～2004年3月31日、ジャカルタほか)

インドネシアの初等中等教育のカリキュラムは10年ごとに改訂となるが、今般、2004年の新学期より導入される新カリキュラム(基本能力重視カリキュラム)に準拠した当プロジェクトを、インドネシア国家教育省初等中等教育総局普通中等教育局との共同で開始した。2003年6月にプロジェクト全体委員会を開催した後、2003年下半年に地方6地域(ジャカルタ首都圏地区、西ジャワ州、中部ジャワ/ジョグジャカルタ特別州、東ジャワ州、バリ州、北スラウェシ州)において、それぞれの地方の高校日本語教師会から推薦された教員(各地域4～6名程度)が中心となって、2年生向けシラバス検討会議を各地区5～6回程度実施した。それぞれの地域の検討会議には国際交流基金派遣青年日本語教師が入って支援を実施。2004年1月26～31日の計6日間ワークショップを開催し、ジャカルタの普通中等教育局にて地方から持ち寄ったシラバス案のとりまとめを行なった。2月以降新カリキュラム導入時からは、シラバスの作成や教材の作成も現場の教師の努力で行なっていかなければならないが、当地の高校教員の能力や経済的問題など、自力で教材作成が難しく、適当な教材も存在しない状況であるため、基金からの専門家・青年日本語教師による技術的な支援と経費的支援が不可欠となっている。

マレーシア

クアラルンプール日本文化センター

1. 概況

2003年のマレーシアを特徴づけたのは、第1に経済の持続的な成長である。通年の貿易収支は、電子・電気産業が牽引し750億4,000万リンギの黒字となり、日本など従来の主要貿易国に加え、中東、中・印向け輸出が20%～40%台の成長となった。民間消費支出、投資誘致額などの好材料も加え、マレーシアの2003年経済成長率は、実質で政府予測の4.5%を凌ぐ5.2%になった。但し、マレーシアの観光産業では、外国人観光客の入国者総数が2000年に1,000万人を突破し、2002年には1,330万人(日本人観光客35万4,500人)に達したが、2003年は、SARSとイラク戦の影響で1,050万人に減少した。国際的には非同盟諸国会議(NAM)の首脳会合や、世界最大のイスラム教組織のイスラム諸国会議機構(OIC)の閣僚会議・首脳会議を開催し、国際的アクターとしての役割も果たした。また、2003年は政権交代の節目の年でもあった。1980年7月から2003年10月まで政権を担当したマハティール首相は、ルック・イースト政策を継承するアブドラ・バダウィ新首相にバトンタッチした。

2. 日本との文化交流事業

23年に及ぶ東方政策で培われた日馬関係を背景に、2003年度の日本・マレーシアの文化交流事業は、日本ASEAN交流年記念事業の実施年として、特筆すべき各種事業が行なわれた。総事業件数740件(2003年末)のうち、マレーシアでは86件が開催され、これはインドネシアの93件について2番目に多かった。国の総人口からするとインドネシアが約2億2,000万人、マレーシアが約2,400万人であり、開催件数を対人口比で見ると記念事業は統計上マレーシアで極めて高いウェートを占めた。

とくに、2003年6月は、日馬両国の合意によりマレーシアの担当月間となった。この期間に行なわれた記念事業のうち、全事業にわたり在馬日本大使館および在馬日本公館の全面的な支援を得て、国際交流基金の事業が約半数を占めた。



日本語教育セミナー

3. クアラルンプール日本文化センターの活動

<活動方針>

2003年度事業では、文化交流事業を通じ東方政策を遂行するマレーシアとの友好関係にさらなる貢献をすることを配慮しながら、次の活動方針をもって臨んだ。

- ・日本ASEAN交流年の記念事業の実施
- ・日本・マレーシア文化交流の中核的推進団体の育成
- ・マレーシア東方政策による人材育成を目的とする日本語予備教育の支援
- ・マレーシア日本語教育の中核となる人材育成
- ・マレーシア日本語教育の現地化と自立化に必要なネットワークの強化
- ・日本研究とアジアセンター事業の支援
- ・芸術交流推進のための現地施設の有効利用およびノウハウの提供
- ・現地の展示・公演団体の活動支援

<2003年度事業例>

●日本語教育セミナー

2004年からマレーシア教育省によって開始される中等教育シラバス改定作業への側面支援を行なうことも考慮し、2003年は「教科書とシラバスを考える」と題して実施した。近隣国における中等教育レベルのシラバス作成の実情を知るため、オーストラリアおよびタイから講師を招き、実際のシラバス作成作業の際に直面した問題や課題等、具体的・実践的な内容とした。

また、併催した分科会では、マレーシアにおける教科書作成および利用法の実情について、中等教育・高等教育・予備教育・民間教育機関の教師が発表した。従来、この分野では横断的な情報交換が活発でなく、参加した教師には多くの実践的なヒントを共有する機会となった。

●JASEAN POPsクアラルンプール公演

6月25日、日本ASEAN交流年の記念事業のメインイベントとして、在マレーシア日本大使館の後援、マレーシア航空の協力を得て、マレーシア国営放送(RTM)と国際交流金の共催で行なわれた。コンサートの事前情報は、新聞・ラジオ等で大々的に取り上げられ、日本・マレーシア両国の人気アーティストの参加とあって、会場となったマレーシア国営放送の前には、早くから来場者の列ができた。マレーシアの各紙報道は、上田正樹とニン・バイズーラ、有里知花とシティ・ヌルハリザ(敬称略)など、日馬両国歌手による歌の共演に高い評価がなされた。コンサートの模様は、後日、RTMの第1チャンネルで、マレーシア全土に放映され日馬交流史に残る特筆すべきイベントとなった。



J-ASEAN POPs クアラルンプール公演

●日本アニメ映画祭

クアラルンプール、ペナン、コタキナバルで、1950年代から90年代にかけてのアニメ映画の代表作を上映し、日本アニメの過去50年の変遷を紹介した。マレーシアでは一般にアニメへの関心が高く、クアラルンプールの会場となった国立博物館には、新聞報道を見た遠方からのアニメファンも含め、5日間で合計2,000名を上回る観客が入場した。この映画会の開催には、一般の入場者に加え、マレーシア・アニメーション協会の協力で、アニメ制作の関係者も足を運んだ。日本アニメに対して、人々の関心と評価はきわめて高く、上映作品を連続して見ていく人が多かった。また、クアラルンプール日本文化センターの存在さえ知らなかった入場者が多数いたため、印刷物やアンケート用紙を配り、文化センターへの現状認識と今後の活動に対する要望の取りまとめを行なう機会にもなった。

フィリピン

マニラ事務所

1. 概況

2003年、アロヨ大統領が次期大統領選挙への出馬の意向を次第に明らかにしたのに対し、11月下旬、人気映画俳優のフェルナンド・ポー・ジュニア氏が立候補を正式表明したことで、政局の関心は2004年5月の大統領選挙に向けて一挙に高まった。

この間、ダバオ空港での爆弾テロ(4月)、マニラ首都圏中心部での国軍クーデター未遂事件(7月)などが発生、アロヨ政権にとっての課題である治安問題の解決には進展が見られなかった。

イラク戦争やSARSの影響、治安問題、更に次期大統領選挙を巡る政治的混乱などの懸念材料により、ペソの対ドルレートは弱含みに推移した。

2. 日本との文化交流事業

日本ASEAN交流年である2003年には、東南アジアを巡回する企画をたてた劇団が多く、それらがフィリピンにも立ち寄りて公演を行なうことがしばしばあり、好評を博した。オペラシスターこんにゃく座による「ゼロ弾きのゴーシュ」、劇団影法師による「プリズム」の公演がその一例である。



日本アニメ映画祭

例年2、3月に開催される日比友好祭では、2003年度については大使館の呼びかけに応え、当地で活動するNGO団体などが共同して事業を行なおうとする新しい動きをみせて注目された。

若者層には、日本のテレビ・アニメーションによる日本語への関心の高まりがみられ、他方、日本との貿易自由化協定交渉を睨み、実用的な日本語教育の必要性も叫ばれるようになり、具体的な検討が各方面で進むようになった。

2003年冬封切の『ラスト・サムライ』は、当地でも多くの観客を集め、日本の伝統的な価値観に対する関心も高まった。

3. マニラ事務所の活動

<活動方針>

フィリピンから日本への入国者数は、東南アジア地域で最大であり、今後も関係が緊密化することが見込まれることから、互いに良いイメージが形成されるよう、以下に留意して事業を行なった。

- ・従来からの日本語教育支援に加えて、IT技術者や看護・介護など新しいニーズへの対応も視野に入れ、研修の充実に努める。
- ・若年層にアピールする映画などによる文化紹介事業とともに、舞台芸術分野などでの日比双方の共同作業・交流を深める。
- ・明るい日本のイメージ形成のため、日本の「笑いの文化」の紹介に努める。
- ・当地NGOを支援し、多様な分野において東南アジア地域全体との交流を視野に入れた事業の促進に努める。

<2003年度事業例>

- ・英語落語(2003年8月、CAP ディベロップメント・アートセンター/セブ市、フィリピン大学・フィリピン文化センター/マニラ首都圏)

大島希巳江氏プロデュースによる英語落語(笑福亭鶴笑、桂あさ吉、桂かい枝、林家和女)の公演をセブ、マニラにて行なった。(敬称略)

大島氏による落語の紹介、それぞれの落語家による英語落語のほか、紙きり・珠簾等の芸の披露では聴衆も参加し、満員の観衆の間に笑いと拍手が絶え間なく続いた。とくに文化庁の文化交流使に認定されている鶴笑氏がひざやすねにつけた人形を操る「パペット落語」は大好評であった。

「英語落語」は、英語力が高く陽気な国民性のフィリピンにおいては、非常に有効な事業であり、日本の「笑いの文化」の紹介に役立ったと言える。



英語落語

- ・日本語教師のためのイメージン・ウィークエンド(2003年9月19日~21日、エンリコ・ロベス・センター/アンティポロ市)

本企画は日本語教師相互の親睦を深める機会の提供、ネットワーク形成促進、教授現場の課題に対する問題意識の開発を目的とし、基金日本語教師研修生および拠点大学所属教師に対象を絞って実施した宿泊研修である。2泊3日の日程で、マレーシアから招へいた日本語教育指導者養成プログラム修了者2名の研究発表、フィリピン大学教育学部カリキュラム開発専門家による特別講演、フィリピン人ファシリテーターによるグループ討議、フィリピン人日本語教師懇談会、教室活動のアイデア・シェアリングなどを行ない、フィリピン人日本語教師16名が参加した。

この研修では日本語教育指導者養成プログラム第1期生が牽引役となり、フィリピン人教師の主体的・自律的な参加を促すことができた。今後の自主的な研さんに繋がることが期待される事業であった。

- ・日本映画祭(2003年9月~10月、フィリピン文化センターほか/マニラ首都圏、2003年11月、アヤラセンター/セブ市、2004年3月、フィリピン大学ほか/マニラ首都圏)

本年度前半の映画祭では、日本ASEAN交流年事業の一環として、北野武監督の作品7本(『菊次郎の夏』『HANA-BI』『その男、凶暴につき』『ソナチネ』『あの夏、いちばん静かな海』『キッズ・リターン』『34 X 10月』)と『サザン・ウィンズ』をはじめASEAN諸国の映画5本を上映した。北野監督が『座頭市』によりベネチア映画祭で銀獅子賞を受賞したのと重なり、新聞をはじめ多くのメディアに取り上げられた。

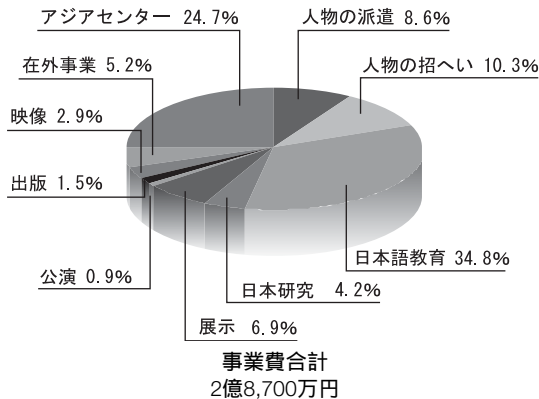
2004年3月の映画祭は日比友好祭事業の一環として実施し「サムライ映画特集」として『椿三十郎』(黒澤明監督)、『座頭市物語』(三隅研次監督)、『風林火山』(稲垣浩監督)、『雨あがる』(小泉堯史監督)、『ジャズ大名』(岡本喜八監督)の5本を上映した。『ラスト・サムライ』が公開された後ということもあり、多くの観客が日本映画に描かれた「侍」の姿を堪能した。



日本語教師のためのイメージン・ウィークエンド
研修風景

南アジア

概要



南アジアにおける事業実績額は2億8,700万円であった。国別では、インドにおける事業実績額が1億7,100万円でもっとも多い。分野別では、日本語教育、人物交流、アジアセンター事業が本地域における事業の柱となっている。

日本語教育では、インドおよびスリランカに長期派遣している専門家を中心に、各種研修、教材寄贈、弁論大会等の支援を行なった。とくにニューデリー事務所付アドバイザーは、近隣の南アジア諸国も視野に入れ、教師ネットワークの形成に努めている。

芸術交流分野では、インド、パキスタン、スリランカ、バングラデシュ、ネパールの演出家による共同制作「南アジア演劇プロジェクト」を開始した。基金は長年にわたりアジア現代演劇の紹介に努めると同時に、アジア域内の演劇交流とアジア発の文化創造を目指して共同制作に取り組んでいる。本年度は、2004年秋の上演に向けて各演出家が意見交換を重ね、東京でそれぞれの作品を紹介した。また、「日本の版画1950 - 1990展」、「こけし展」を各国に巡回したほか、第11回バングラデシュ・アジア・ピエンナーレに参加した。日本国内におけるアジア紹介としては、美術セミナー「アジアのアヴァンギャルド」のパネリストとして、スリランカからジャガト・ウィーラシンハ氏を招へいした。

知的交流分野では、アジア・リーダーシップ・フェロープログラム、「日印仏教哲学セミナー」、「日印作家キャラバン2003」等を実施した。

海外事務所報告

インド

ニューデリー事務所

1. 概況

政治面では2003年12月、国民会議派が政権を担うラージャスタン州、マディヤ・プラデシュ州、チャティスガル州およびデリー準州の4州で州議会選挙が実施されたが、デリーを除いた3州でインド人民党が勝利を収めた。州議会選挙での勝利、好調な経済成長などを背景とし、バジパイ政権は任期満了(2004年10月)を待たず下院総選挙実施の意向で、2004年2月にカラーム大統領は下院議会を解散した。

外交面において中国との関係はやや改善され、とくに経済関係を中心に関係が拡大しつつある。6月にバジパイ首相が中国訪問し、「印中関係および包括的協力の原則に関する宣言」を発売したほか、10月および2004年1月には国境問題に関する特別代表者会合が開催された。

パキスタンとの関係は4月のバジパイ首相の友好的な発言以来、印パ両国は大使の交換、両国間バス、鉄道、航空路など交通が再開し、関係改善に向けた前向きな動きがみられている。2004年1月には約2年半ぶりの印パ首脳会談が実現した。

2. 日本との文化交流事業

デリーでは2003年9月にホンダのロボット“アシモ”発表会が日本大使公邸で行なわれ、日本の最先端技術に関心の高いインドの科学技術関係者、文化関係者らが数多く集まった。

11月にはデリー、北京、ソウル、東京の4都市が参加して第2回アジア舞台芸術祭が実施され、室伏鴻氏、黒沢美香氏、川口隆夫氏による現代舞踊公演およびワークショップを行なった。

2004年2月にはアジア仏教者会議、3月には世界バンブー会議が催され、それぞれ日本から仏教関係者、竹に関する研究者や芸術家などが参加した。

日本語教育分野では、インドの大学レベルにおいてデリー大学、ジャワハルラル・ネルー大学を中心に、パナラス・ヒンドゥー大学、ヴィシュヴァ・パーラティ大学、ブネー大学、バンガロール大学などの地方大学でも日本語教育を行なっており、学生や社会人の中で高い人気を得ている。近年のインドIT企業の隆盛および日本との経済関係の深まりとともに日本語教育への需要も高まっており、このような状況のもと、インド政府自らも日本語学習者を支援する補助金制度の実施を開始した。

3. ニューデリー事務所の活動

<活動方針>

10億人を超える人口をもつインドにおいて、とくに国際的、国内的に影響力の強いエリート層、ミドルクラス、また次世代を担う若年層を主要ターゲットとし、地域的にはデリー、コルカタ、ムンバイ、チェンナイ、バンガロールなどの大都市を中心に、以下5点の活動方針のもとに事業展開している。

- ・知的交流、市民交流の強化
- ・急増する日本語学習に対する効果的対応
- ・伝統と現代のバランスのとれた日本像の形成
- ・映画上映などによる映像メディア交流の強化
- ・事業を実施する地域、対象となる層の拡大

<2003年度事業例>

● **学校における日本文化紹介**(2003年4月19日、シュリーマティー・ラーム・ラーティ・グプター女子短大/サハーランブル)
サハーランブルは、デリーから北に約200kmにある地方都市である。シュリーマティー・ラーム・ラーティ・グプター女子短大において学生および教師向けに折り紙・茶道・華道・日舞・習字などの日本文化体験講座を開いたほか、『菊次郎の夏』『羅生門』の映画上映会には学生、教師約400名が参加し盛況であった。

首都デリーにとどまらず、地方都市においても日本文化紹介事業を実施していくことは広大な土地と人口を抱えるインドにおいて欠かすことはできない。

● **現代舞踊公演**(2004年2月24日、スリ・ラム・センター/デリー、ムンバイ、チェンナイ、コルカタ)

山田せつ子&枇杷系グループの4名により、現代舞踊公演およびデリーを拠点とする舞踊グループ・プーミカとワークショップをおこない、公演内容は国営テレビでも紹介された。観客入場数は約350名程度に達した。

デリー市民および舞踊関係者にとって今回の公演は、2002年度東京コンテンポラリーダンス公演(基金主催)、2003年11月アジア舞台芸術祭での現代舞踊公演(東京都主催)につづく、日本の現代舞踊にふれる3度目の機会であり、市民のあいだで現代舞踊に対する理解が徐々に深まってきたといえる。

● **基金フェローコンファレンス**(2004年3月19日、インド国際センター/デリー)

過去に基金のプログラムにより日本を訪れた研究者、芸術家、日本語関係者などを招き、基金ニューデリー事務所開設10周年の記念コンファレンスをおこなった。まずパネリストによりインドにおける日本語、日本研究、知的交流、芸術などの状況が紹介されたのち、各分野における日本との関わりおよび本基金

が今後果たしうる役割などについて80名ほどの参加者で終日活発な議論が交わされた。

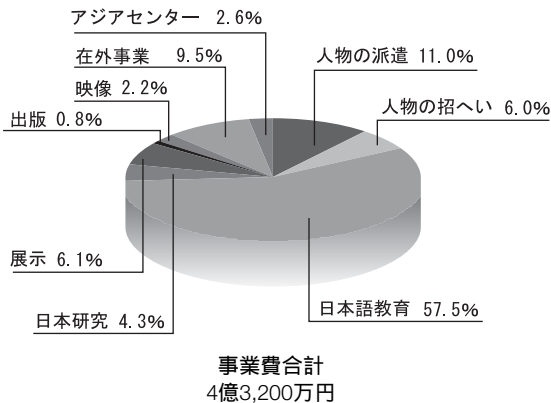
本コンファレンスは基金フェローの初回同窓会でもあり、今後も数年ごとに実施し、基金に提言などを行なえるような存在として根付いていくことが期待される。



基金フェローコンファレンス

大洋州

概要



大洋州における事業実績額は4億3,200万円であった。

分野別では、日本語教育の比率が高く、56.5%を占める。2003年度に実施した海外日本語教育機関調査によれば、オーストラリアにおける日本語学習者数は38万2,000人で、韓国、中国に続く世界第3位であった。オーストラリアの日本語教育支援については、日本語教育を通じた日本文化理解の拡大を目指して、同国の初中等教育における国際理解教育、また広い国土をオンラインで繋ぐ遠隔教育の取り組みとの連携に留意している。各州教育省に日本語教育アドバイザーを派遣しているほか、各種研修、弁論大会、教材制作などの支援事業を行なった。また、ニュージーランドにおける日本語学習者数は2万8,000人を数え、世界第8位である。

大洋州島嶼国においても、経済、観光面での結びつきを通じて日本語学習の需要があり、教材寄贈、弁論大会、教師研修、外交官を対象とした専門日本語研修などにより支援に努めている。

さらに、高等教育機関で日本研究が行なわれているオーストラリア、ニュージーランドについては、日本研究機関代表者20名による「豪州・ニュージーランド日本研究機関代表者会議」を開催した。大洋州における日本研究の現状と課題について議論を深めるなか、同地域では大学・研究機関の組織再編が進み、従来の日本研究がより広くアジア研究の一環として位置付けられていることが指摘されるなど、今後の日本研究支援のあり方を検討する上で貴重な機会となった。

芸術交流分野では、「日本美術における四季展」、「水と油」によるダンス・パントマイム公演を実施したほか、「オーストラリア芸術見本市2004(APAM)」や、シドニー、メル

ボルン、ブリスベンの各国際映画祭等に協力した。また、ニュージーランドで「写楽再見展」、パプア・ニューギニア、フィジーで「こけし展」を実施した。日本国内では、日豪の共同企画による現代美術展「Living Together is Easy: 日本とオーストラリアにおける作家12人」を水戸芸術館で開催した(2004年度はメルボルンに巡回予定)。

知的交流分野では、アジア大洋州地域の共通課題解決と相互理解促進に努めており、今年度はニューイングランド大学主催の国際会議「東南アジアの移民労働」などを助成した。同会議は、多文化主義を掲げ積極的に移民を受け入れてきたオーストラリアの経験が、地域の共通課題解決に貢献する可能性を示す好事例となった。

海外事務所報告

オーストラリア

シドニー日本文化センター

1. 概況

2003年3月にハワード政権は、国内一部世論の反対を押し切り、米国主導のイラク攻撃にオーストラリア軍を参戦させた。その後も治安や経済状況の悪化したソロモン諸島やパプア・ニューギニアといった南太平洋島嶼国への軍事介入を行ない、豪州・ニュージーランドを軸に大洋州の地域連合体構想を発表した。一方、ブッシュ大統領がオーストラリアを「地域の保安官」と発言したことを契機に、アジア諸国からはオーストラリアに対する警戒感、批判が増大した。

経済、金融面では、2003年初頭のアジアでのSARSの発生、干ばつ、豪ドル高の影響で外需には一時的にかげりが生じたものの、住宅投資・消費支出等の好調な内需に支えられ順調な景気拡大が続き、失業率も空前の5%台まで低下した。また、世界的に高金利である豪ドルは投資対象としての魅力を集め、豪ドルの対米ドル為替相場も3割程度上昇した。10月から11月にかけて実施されたラグビー・ワールドカップも、国内の消費を押し上げるのに一役買った。

日本との関係については、7月にハワード首相が来日し、前年の小泉首相訪豪の際に提唱された日豪の「創造的パートナーシップ」構築については両国首脳間で再確認がなされたものの、両国間のFTA(自由貿易協定)協議は進展しなかった。日本はオーストラリアにとって最大の貿易相手国である状況に変化はないが、その比率は落ち込んでおり、相対的にオーストラリア国内での経済面での日本の存在感は低下している。事実、日本企



水と油

業の豪州市場からの撤退といった動きもシドニーを中心に加速している。その一方、日本からの技術移住者や留学生は増加傾向を辿り、2001年の国勢調査によると、全豪の日系コミュニティの規模は2万5,000人に達しており、5年間で11%増加したとの統計が示されている。このほか、日豪間で初めての姉妹都市締結(ニューサウスウェールズ州リズモア市と奈良県大和高田市)から40周年を迎えたことを記念して、ニューサウスウェールズ州オレンジ市で両国の姉妹都市関係者を中心に記念式典が開かれた。

2. 日本との文化交流事業

多文化主義を掲げるオーストラリアでは、大都市においては日常生活の至るところに移民がもたらした文化が息づいている。現代美術や舞台芸術をはじめ、映画、アニメーション、漫画、食文化、ファッションなどさまざまな分野で、現代日本の文化もかなり定着している。東京のストリートファッションをテーマとした写真展「FRUITS」や劇団「青年団」による「東京ノート」メルボルン公演の成功も、そうした土壌を背景としている。

教育関連では、連邦政府のアジア言語重視政策の代表格であったNALSAS(National Asian Languages and Studies in Australian Schools)が2002年末に打ち切れ、日本語教育機関、学習者数の減少および国民のアジア地域に対する関心の低下が懸念されたが、日本語教育機関数は漸減傾向が見られるものの、学習者数は1998年調査時の31万人からこの5年間で38万人にむしろ増加している。

日豪間の文化交流の担い手も多岐にわたっている。例えばオーストラリアは日本の相手国別姉妹都市締結数では米国、中国について世界第3位となっている(99件、2003年)。また、生け花、茶道、武道などの日本の伝統文化に関心を有するオーストラリア人が自ら文化団体を組織し、その普及・促進に努めるといったケースも多い。一方、当地では日本人アーティストの活動も活発で、とりわけ、ダンスや演劇、映画、美術、デザインといった分野での活躍が顕著であり、日豪アーティスト間の共演も盛んに行なわれていて、これらの活動は多文化社会であるオーストラリアの文化の一部を担っている。

3. シドニー日本文化センターの活動

<活動方針>

事業費の大半を占める日本語教育・日本研究支援については、教員研修の充実、初等・中等教育課程から高等教育課程への継続学習の推進、センター図書館と大学図書館のネットワー

ク作りなどに重点を置いている。知的交流事業では、アジア大洋州地域の共通課題に対し、日豪両国が協力しつつどのように貢献できるかを主要なテーマにしている。このほか、芸術交流事業では、国際芸術祭や映画祭などの連携・協力、助成事業の積極的活用、在留邦人アーティストを介した芸術交流の促進を図っている。

<2003年度事業例>

●「日本美術における四季展」(2003年8月16日～10月26日、ニューサウスウェールズ州立美術館/シドニー)

基金、文化庁、ニューサウスウェールズ州立美術館の共催により、同美術館にて開催された。同展への総入場者数は当初予想の2万人を大きく上回って3万4,000人を突破したが、重要文化財を含む出展作品の質の高さに加え、「四季」という極めて平明で理解しやすいテーマに絞り込んだことが、一般市民の関心を広く集める結果となった。来館者からは、オーストラリア国内ではこれまでに見たことのない作品群への驚嘆、歴史の浅いオーストラリア市民の日本の伝統文化に対する憧憬、四季折々の日本人の繊細な感性に対する共感といった声が賛辞として多数寄せられていた。

●シドニー日本文化センター設立10周年記念フォーラム “Australians & Japaralians? : Celebrating Cross-Cultural Transformations” (2003年10月25日、パワーハウス・ミュージアム/シドニー)

キーノート・スピーカーには、ファッション・デザイナーのイソガワ・アキラ氏とレストラン・シェフのワクダ・テツヤ氏を迎え、多文化社会のオーストラリアにおいて、異文化の狭間に置かれた日豪の人々が、自らの困難な経験をどのように肯定的に変容させていったのかに焦点を当て、日豪間の文化交流の変遷と多様性を再認識するとともに、それがどのようにオーストラリアの新たな文化創造に貢献しているのかを探った。

●第7回巡回日本映画祭(2003年9月～11月、キャンベラ、ブリスベン、メルボルン、パース、アデレード、シドニー)

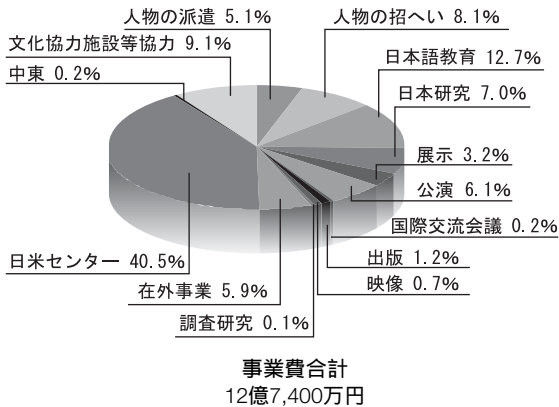
全豪6都市で『千と千尋の神隠し』『ウォーターボーイズ』『二十四の瞳』『みんなの家』が上映された。また、シドニーでは、アジアパシフィック映画祭事務局、在シドニー日本国総領事館との共催によって規模を拡大し、日本から近代映画協会社長の新藤次郎氏および新藤風監督を招へいして新藤兼人監督、新藤風監督作品も併せて上映したほか、日本とオーストラリアにおける映画制作と配給の現状とその展望に関するシンポジウムも開催した結果、オーストラリア国内各メディアでもさまざまな角度から取り上げられ、大きな反響を呼んだ。



記念フォーラム

北米

概要



2003年度に北米向け事業に充当された事業費は、約12億7,400万円で、対米事業費は基金事業費全体において最大の割合を占めるとともに、対カナダ事業費も昨年とほぼ同程度の割合を占めている。

今年度は、米国との間で「日米交流150周年」、カナダとの間で「日加修好75周年」を迎え、それぞれ各種記念事業を各分野で実施した。

知的交流分野では、日米交流150周年記念事業「日米同盟の再定義」をニューヨークの日本協会と共催で、「日加国交樹立75周年記念シンポジウム」をトロント大学と共催で開催し、好評を博した。

また、市民交流分野では、日米交流150周年を記念し、日本語教育用マルチメディア教材を利用し、社会科学系の授業で日本理解教育を行なうためのレッスンプランを開発・展開する、日本理解教育プロジェクト「Snapshots from Japan：7人の高校生の素顔」を実施した。

日本研究分野に関しては、米国については在米諮問機関であるAAC (American Advisory Committee) の審査・提言を仰ぎ、プログラム改善を進めており、カナダについてはカナダ大学協会と共同で、日本研究機関助成事業を実施している。今年度は北米の日本研究調査を実施し、今後この結果を基に、より効果的な事業の遂行を図っていく。

日本語教育分野では、教師・研究者の育成とともに、そのネットワーク形成・強化に向け、引き続き支援を行なった。

日本文化紹介、芸術交流分野では、現地の文化・芸術機関との連携・協力を進めつつ、今年度は、NYのJapan Societyや、Korea Foundationなどと共催で「日韓初期仏教美術展」を実施したほか、海外展助成としてメトロポリタ

ン美術館の「織部の芸術と桃山文化展(The Art of Oribe and Momoyama Culture)」などを支援し、各事業は米国主要紙において高く評価された。さらに、日本文化紹介派遣主催事業として、邦楽公演、アニメーション講演会を各地で実施したほか、対米向け公募プログラム「パフォーミング・アーツ・ジャパン」により、「野村万作と『万作の会』」など7団体が、北米25都市を巡回、2万人以上の観客を動員し、メディアの注目を集めるとともに、高い評価を得た。また、パークレー交響楽団と田中カレン氏など6件の共同制作も実施し、新作はいずれも中間発表の段階から、観客とプレス注目を集めた。

基金が日本側事務局を務める日米文化教育交流会議(カルコン)については、11月に仙台において第21回合同会議が開催され、デジタル文化ワーキング・グループによる提言と報告を始め、各種報告および討議が行なわれた。また、これに合わせて「文明間対話における市民の役割」をテーマに記念シンポジウムを行なった。

海外事務所報告

カナダ

トロント日本文化センター

1. 概況

2003年のカナダは、新型肺炎(SARS)の流行に始まり不安要素が多い一年となった。また2001年の同時多発テロ、SARSの流行などの影響を受け長期にわたる経営不振に拍車がかかり、カナダ最大手航空会社エアカナダが破産保護法を適用、会社更生手続きを申請した。一方、アルバータでは狂牛病が確認され、アメリカ、日本などがカナダからの関連製品の輸入を禁止する措置を取った。政治面では、10年間にわたり首相を務めたジャン・クレティエン氏に代わり、ポール・マーティン氏が第27代首相に就任した。同首相は国民生活の向上に資する社会基礎の強化、21世紀の経済構築、国際社会に貢献するカナダの役割の確立を3本柱に新内閣を発足した。GDP成長率は昨年より1.6%減の1.7%にとどまった。文化面では、ドゥニ・アルカン監督の“The Barbarian Invasions (邦題：みなさん、さようなら)”がカンヌ国際映画祭で最優秀脚本賞、最優秀女優賞、アカデミー賞で最優秀外国語映画賞を受賞し、世界的に高い評価を得たほか、“Seducing Doctor Lewis”、“The Corporation”がサンダンス映画祭でそれぞれドラマ観客賞、ドキュメンタリー観客賞を受賞し、カナダ映画の興隆が目覚しい一年であった。



日韓初期仏教美術展



織部の芸術と桃山文化展

2. 日本との文化交流事業

カナダでは日本のポップカルチャーの継続的な人気に加え、伝統文化に対する需要も高く、両者がさまざまな形で紹介されている。2003年は日加修好75周年に当たり、大型事業として狂言レクチャー・デモンストレーションが東部カナダ各地(オタワ、モントリオール、トロント)を巡回、トロントでは桂歌丸氏率いる一団が落語公演を行なった。またカナダを代表するピアニスト、イブ・エゴヤン氏が近藤譲、藤枝守両氏に委嘱した新曲の初演を行なった。日本の現代文学も積極的に紹介されており、トロントで例年行なわれる国際作家祭に江国香織氏、リーディングシリーズには高橋源一郎氏が参加し自作の朗読、公開インタビュー、サイン会を行なった。大型書店ではグラフィックノベルのコーナーが設けられ、日本漫画の翻訳版が並び、漫画の普及は更なる拡大傾向にある。ほかに『千と千尋の神隠し』とケーブルテレビで放送されカルト的人気を得た『カウボーイビバップ』の映画版が劇場公開されたほか、カナダ3大映画祭(バンクーバー、モントリオール、トロント)では計39本の日本映画が上映された。そのうちの1つであるトロント国際映画祭では、観客投票による最優秀作品賞に北野武監督『座頭市』が選ばれた。

3. トロント日本文化センターの活動

<活動方針>

日本の27倍という広大な国土を有するカナダでは、ケベック州を中心とするフランス語圏とそれを取り巻く英語圏の共存に加え、さまざまな民族グループの背景文化を容認する多文化主義を掲げている。センターではこれらの特性に留意し、各地の公館やカナダ側の公的機関の協力を得つつ、基金事業の円滑な遂行に努めている。芸術交流・文化紹介事業では、カナダ側の文化・芸術機関と連携し波及効果の高い事業実施に注力した。またカナダ側のニーズを吟味し、伝統と現代のバランスにも考慮し事業を実施した。日本語教育・日本研究支援事業に関しては、長期的視野に立ち、全国レベルでの専門家間のネットワーク形成や将来の日加交流を担う人材の育成に資する事業を重点的に行なった。対カナダ日本研究特別事業に関しては、現地事情に即した事業実施のためカナダ大学協会との共同事業として実施した。

<2003年度事業例>

- 狂言レクチャー・デモンストレーション(2003年9月23日、トロント日本文化センター/トロント)



狂言レクチャー・デモンストレーション

茂山狂言会の狂言師・松本薫氏によるレクチャー・デモンストレーションを在トロント日本総領事館ならびにヨーク大学との共催で実施した。冒頭の講演で松本氏は、狂言は「笑い」の伝統芸能であると定義し、笑いが持つ力、静寂美と理解されがちな日本文化の異なる一面を紹介するのが狂言の役割であると述べた。壇上に数名の観客を迎え、狂言の基本姿勢や歩き方・動作・発声法を指導し、最後に「那須の与一」「猿歌」を披露した。日本の伝統芸能に初めて接する者が大半であったが、松本氏の観客を引き込む語り口、活気あふれる実技により、公演時間2時間余の間、彼らの集中力は途切れることなく、松本氏と170名の観客が一体となったレクチャー・デモンストレーションとなった。

- 「月の岬」翻訳朗読上演(2004年1月9日~10日、トロント日本文化センター/トロント)

クロウズ・シアターに制作を委嘱し、松田正隆氏の戯曲「月の岬」(英題Capemoon)を翻訳朗読上演した。本事業は役者が台本を持ち簡素な舞台で演技をする朗読上演という斬新な形態であったが、制作陣に限られた空間を大胆に活かし、原作の詩的な雰囲気や十二分に汲み取りわかりやすく舞台化したことにより、観客から高い評価を得た。また観客の多くは、登場人物が抱える問題や日常に潜む歪みを鋭く提示する一方、安直な結論を導き出さず、全てを観客に委ねセリフの行間を読ませる手法が興味をかきたて新鮮であると評し、日本発の戯曲を積極的に楽しみ、その独自性を考察する姿勢が印象的であった。

- 日加修好75周年記念シンポジウム(2004年3月1日、トロント大学マクセンター/トロント)

日加修好75周年を記念し、センターとトロント大学マクセンターの共催でシンポジウムを開催した。本シンポジウムでは日加両国における高齢化社会、建築・都市計画、現代日本の映画・文学をテーマにした3パネルを設定し、計8名の日本研究者が発表を行なった。聴衆からは、現在の日本の姿や社会問題を捉えるだけでなく、それらの情報をカナダの社会問題と比較考察する機会を持つことができる相关性に富むシンポジウムであったとの声が寄せられ、修好75周年にふさわしい事業となった。



月の岬翻訳朗読上演

米国

<概況>

2003年3月に始まった米国とその同盟国の対イラク軍事行動は、一部にあった長期化の予想を覆し、約2か月という短期間でフセイン政権の崩壊をもたらした。2003年5月1日のブッシュ大統領による戦争終結宣言により、2001年9月11日の同時多発テロ事件以降米国が推進してきた「テロとの闘い」は一つの区切りを迎え、安定した支持率を背景に、米国政府の対外政策は新たな段階に入ると予想するむきもあった。しかし、その後の米軍によるイラク占領統治下でのテロの頻発、武力衝突の激化や、ブッシュ政権が先制攻撃の論拠とした大量破壊兵器が発見されない、といった事態が生じたことにより、米国は年間を通じ国内外で困難な政策の舵取りを余儀なくされた。また、イラク情勢だけでなく、イスラエル・パレスチナ間の問題も引き続き予断を許さない状況が続いている。

他方、国内情勢に目を向けると、経済は引き続き好調であり、安定した成長を続けているが、その好調さが雇用の増大につながっておらず、失業率が高止まりしていることが問題点として指摘されており、2004年11月2日に投票が行なわれる大統領選挙においても、イラク復興をはじめとする対外政策とともに、雇用、年金、医療福祉といった国内経済政策が、今後大きな争点となることが予想される。

ニューヨーク事務所

1. 日本との文化交流事業

政治・経済面での安定した日米関係を背景に、基金事業のほかにも官民交えさまざまな文化交流事業が全米で展開された。とくに2003年はペリー提督の浦賀来航から数えて150周年に当たるため、これを記念する事業も数多く執り行なわれた。

美術の分野では、日本人現代作家の活躍と米国美術界への浸透ぶりが増す顕著に見られた一年であった。森万里子「ウェブUFO展」、杉本博司氏の写真インスタレーションは、いずれも米国の主要美術団体のイニシアチヴによって実現したほか、2003年9月にはロックフェラーセンター前広場に村上隆氏の巨大インスタレーション「二重螺旋逆転」が登場、日本のアニメとオタク文化に対する一般の関心呼び起こした。これら日本人作家の目覚ましい活躍の背景には、日本の現代文化に関心を寄せる米国人の学芸員や批評家の存在があることを忘れてはならない。

イラク戦争の影響で外国人に対する査証発給が厳格化され、申請から取得までに長期にわたる煩雑な手続きが必要となり、海外からのアーティスト招へいが格段に困難になるなかで、日米間の舞台芸術交流は着実に進められた。とくにコミュニケーションの上で言語の違いが比較的問題にならないダンスの分野では、両国のアーティストが対等な形で共同制作に取り組む複数のプロジェクトが行なわれた。Attack Theatre (フィラデルフィア)とニブロール(東京)の日米両国での創作活動と公演は、その好例と言えよう。他方、日本の伝統芸能に対する人気も根強く、2004年3月の能楽協会ニューヨーク公演は連日満員御礼を記録する成功を収めた。

映画関係では、『キル・ビル』『ラスト・サムライ』『ロスト・イン・トランスレーション』といった日本を題材に取り上げたハリウッド映画が次々と封切られ、また、山田洋二監督の『たそがれ清兵衛』がアカデミー賞外国語映画部門賞の候補に残り、その後ニューヨークとロサンゼルスで一般公開されるなど、近年になく日本が大きな存在として認識された1年であった。2003年秋には小津安二郎監督生誕100周年を記念し、ニューヨーク映画祭で同監督36作品の回顧上映が行なわれ、大好評を博した。小津特集はその後、西海岸(バークレー)にも巡回したほか、シカゴ国際映画祭では初期の小津作品が活動弁士付きで上映されるなど、小津監督の世界映画史上に残る業績と、同監督作品の現代における意義が見直される好機となった。

2. ニューヨーク事務所の活動

<活動方針>

ニューヨーク事務所は、全米に対する日本研究支援事業、舞台芸術交流事業および日米親善交流事業を行なうと共に、美術・映画・出版といったその他の事業については、ロッキー山脈以東37州をニューヨーク事務所が、残り13州をロサンゼルス事務所が所掌している。なお、全米に対する日本語教育事業はロサンゼルス事務所が所管している。

米国では都市、地域ごとに日本への関心や理解の度合いが異なることから、現地のニーズにきめ細かく対応するため、各地の在外公館の協力を得ると共に、日本研究支援、舞台芸術交流、日米親善交流の各事業分野については委員会や評議会をニューヨーク事務所内に設置し、当該分野の有識者や専門家の助言を得つつ、現地事情に即した効果的な事業推進に努めている。

とくに2003年は、ペリー提督浦賀来航150周年に当たり、全米各地でさまざまな行事が企画されたことから、映画上映、小規模助成といったニューヨーク事務所の持つさまざまな事業スキームを有効に活用しつつ、情報の収集と提供、各種斡旋と調整に努めた。



第47回APAP年次総会における広報事業

<2003年度事業例>

- 大学巡回日本映画上映会(2004年1月18日～3月31日、オハイオ州立大学ほか4大学)

日本文化が紹介される機会が比較的少ない地域において、地元の大学などの協力を得て毎年実施しており、2003年度は、中西部のイリノイ州(イリノイ・ウェズリアン大学)、ミズーリ州(サウスイースト・ミズーリ州立大学)、オハイオ州(オハイオ州立大学)、ケンタッキー州(ケンタッキー大学)の4州4大学で実施した。

Woman in Filmをテーマにして、『細雪』(市川崑監督)、『うなぎ』(今村昌平監督)、『幻の光』(是枝裕和監督)、『たそがれ清兵衛』(山田洋二監督)の4作品を上映し、普段観る機会のない日本映画に触れる貴重な上映とあって、いずれの上映会とも好評を得ており、現代日本社会の一端を紹介する上で有効な事業となった。

- 「パフォーミング・アーツ・ジャパン」(2003年4月1日～2004年3月31日)

日本の優れた舞台芸術をニューヨーク、ロサンゼルスなどの大都市のみならず、広く全米各地に紹介すると共に、日米両国のアーティストによる新たな共同制作を促進するための助成プログラムである。2003年度は、「大駱駝艦」(現代舞踊、American Dance Festival)、「ダムタイプ」(現代舞踊、California Institute of the Arts)、「野村万作と『万作の会』」(古典芸能、Theatre of Yugen)など、7つのカンパニーが北米25都市を巡回公演し、2万人以上の観客を動員したほか、Headlong Dance Theaterとアローダンスコミュニケーション、エイコ&コマ(いずれも現代舞踊)などが手掛けた6件の共同制作は、すでに中間発表の段階から、観客およびプレスに高く評価された。

- 「舞台芸術プレゼンター協会(APAP)第47回年次総会における広報事業」(2004年1月10日～13日、ヒルトンホテル/ニューヨーク)

世界最大の芸術見本市であるAPAP年次総会において、米国のプレゼンター(劇場のプログラム編成責任者)に向け、日本の舞台芸術に関する広報を行なった。大会期間を通じて、出展ブースでの資料配布や情報提供を行なったほか、1月11日には、日本の舞台芸術に関心を有するプレゼンターを集めたブリーフィングを実施し、山口宏子氏(朝日新聞社学芸部)が現代演劇、楳屋一之氏(世田谷パブリックシアター)がコンテンポラリー・ダンスの最新状況を、個別の作品やアーティストのビデオを上映しながら解説した。これら一連の広報事業により、将来的に、米国における日本の舞台芸術紹介チャンネルの拡大と多様化が期待される。

ロサンゼルス事務所

1. 日本との文化交流事業

米国西海岸には従来多くの日系アメリカ人および日本人が居住しているが、中でもロサンゼルス地域には、米国最大の日系社会(日系アメリカ人推定約25万人)が形成されている。日系二世および三世は、茶道・華道・日本舞踊・武道を始めとする日本の伝統文化の継承に大きな役目を果たしているほか、四世以降の若い世代では、和太鼓や舞踏、アニメなどの比較的新しい分野で活躍する者もみられるようになった。

西海岸地域における一般アメリカ人の日本文化に対する関心も、従来型の伝統芸能、武道、歴史・文学などに加え、昨今はアニメ、TVゲーム、カラオケといったポップカルチャーや、鮎などの日本食、日本人プロ野球選手の活躍などに向けられるようになり、人々の生活レベルにまで浸透している。こうした大衆文化の流入によって、日本語学習者数は今後も堅調に推移するものと予想される。

2. ロサンゼルス事務所の活動

<活動方針>

西海岸の大都市地域においては、日本文化に通じたアメリカ人の専門家が多いことから、こうした専門家を擁する美術館・劇場・映画館などに対しては、主に小規模助成を通じて側面的に支援してきた。一方、内陸州の中小都市においては、日本文化が紹介される機会が非常に少ないため、大学の日本研究センターや日米協会などを足がかりに、事務所との共催形式による日本文化紹介事業を積極的に推進してきた。

日本語教育については、ワークショップ開催など、従来の日本語教師を対象とした事業のほか、日本語学習誌の発行など、日本語学習者に直接焦点を当てた事業も行なっている。また、近年は1990年代のような著しい学習者数の伸びは見られず、逆に各州の教育財政事情の悪化により、日本語を始めとする外国語教育の存続の危機が叫ばれるようになってきたことから、各学校・教育行政機関やPTAをターゲットとした日本語教育普及広報活動を開始した。

<2003年度事業例>

- 箏・尺八コンサート

尺八奏者の藤原道山氏と箏奏者のみやざきみえこ氏で構成されたデュオEAST CURRENTによる箏・尺八コンサートをサンディエゴ(カリフォルニア州)とフェニックス(アリゾナ州)にて開催した。共にプロの演奏家による邦楽コンサートが実施され



箏・尺八コンサート

る機会が少ないため、会場には多くの一般市民や学生が詰めかけた。楽器のレクチャー・デモンストレーションや、箏・尺八によるジャズの演奏など、高度なテクニックと伝統や形式に囚われない演奏スタイルが、アメリカ人には非常に好評であった。

● US SUMO OPEN 2004

ペリーが日米和親条約を締結する1854年3月31日の1週間前に相撲観戦したことに因み、日米交流150周年記念事業として、元横綱の武蔵丸親方を特別ゲストに迎えて外国人アマチュア力士による相撲選手権を開催した。当日は約500人の観衆で満員となり、200人以上が会場に入れないほどの盛況振りであった。また、リトルトーキョーで開催したにもかかわらず、観衆のほとんどが日本人・日系人以外の、いわゆる一般のアメリカ人であったほか、地元主要紙の積極的な取材も見られた。

● 日本語教育広報キットの制作・配布

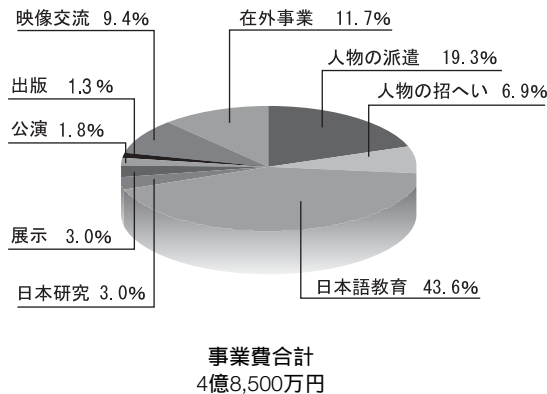
昨今の地方教育行政の財政事情悪化による外国語教科削減傾向に対処するため、日本語教育の維持・開始に有用な情報を集めた小冊子と、実際の教育風景・日本語教育関係者の声を編集した17分間のビデオ・テープをセットにした日本語教育広報キットを2,000部制作し、各教育機関や在米公館などに配布した。遠く豪州の日本語教師からも本キットに対する好意的な反響が寄せられた。



US SUMO OPEN 2004

中南米

概要



対中南米地域の基金事業実績額は約4億8,500万円で、総事業費の約4%を占める。

中南米地域については、今後の中南米地域と日本との交流を一層促進する端緒となるような人物交流事業を重視しており、グアテマラ国立交響楽団会長、ニカラグア国立ルベン・ダリオ劇場館長、メキシコ国立シネマテーク事務局長、プエノスアイレス市立サン・マルティン劇場映画会企画ディレクターなど、文化人を招へいし、日本側関係者との意見交換の機会を設けた。

こうした人物交流の成果が、さらなる事業へつながった事例として、昨年度の中南米フェスティバル関係者グループ招へい事業がきっかけとなり、セルバンティーノ国際芸術祭やブラジルでの公演につながったパパ・タラフマラの「SHIP IN A VIEW 中南米ツアー」が挙げられる。今年度は、本事業のほか、チリでのコンドルズ公演や、キューバのベニーモレー国際音楽祭への参加事業などを支援した。

さらに、ホンジュラスへ派遣した演劇専門家が現地の劇団と協力した「米百俵」公演が話題となったほか、伝統音楽からジャズ、ラテン音楽、スポーツといった幅広い分野の専門家を、各地の「日本文化月間」の実施時期などに合わせて派遣した。また、「くまもとアートポリス展」「現代陶磁器展」「写楽再見展」などを日本の文化に触れる機会の少ない中南米各国で実施した。

メディア関連事業としては、サンパウロ、ブラジリア国際映画祭、アニメ・ムンディ国際アニメ映画祭を支援するとともに、中南米での「日本アニメ映画祭」の巡回、成瀬巳喜男監督特集のブラジル、アルゼンチン巡回などに協力した。また、波及効果の高いテレビ交流促進事業も進めており、『プロジェクトX：挑戦者たち』をエルサルバドルで放映し、大きな反響を得た。

一方、日本国内での中南米の文化を紹介する事業として、ブラジルの現代舞踊グループの京都ピエンナーレやダンスサミット2003への参加、コスタリカのダンスグループのJADE2003インターナショナル・ダンス・フェスティバルへの参加を支援した。

日本語教育については、日系人の子弟を対象とした日本語教育が始まった国においても、外国語としての日本語教育に移行してきている。こうした各国の状況に合わせた日本語教育の基盤整備を進めている。さらに、中南米における日本研究の実態を把握し、より効果的な事業展開を図るため、調査を行ないつつ、日本人客員教授の派遣、図書の寄贈などを通じて、日本研究拠点の形成を図り、研究者の育成やネットワーク形成に資する事業を実施した。

中米の貴重な文化遺産保存への協力として、ホンジュラスのコパン遺跡、グアテマラの国立考古学博物館へ、文化遺産保存専門家を派遣している。

海外事務所報告

メキシコ

メキシコ事務所

1. 概況

2003年7月に行なわれた中間選挙では与党である国民行動党が敗北、議席を大きく減らし政治運営に支障をきたす傾向がますます強まった。フォックス政権は低迷する財政収入に対する税制改革案として消費税(IVA)を現行の15%から13%に下げ、所得税減税をする代わりに、流通・卸売部門に8%の税金をかける法案を国会に提出したものの、議会の多数派を占める野党が反発、法案は棚上げになるなど、政治的な混迷が続いている。

また10月にカンクンで開催されたWTOのサミットでは、反グローバリズム主義者による連日の集会やデモが目立つ結果となった。

文化面ではラテンアメリカ最大規模の芸術祭であるセルバンティーノ国際芸術祭が資金不足で日程調整が難航し、例年5月に実施される総合紹介イベントが8月までずれこむなどの混乱が起きたが、招待国であるドイツ、フランスを中心としたハイレベルの舞台芸術作品が上映された。そのなかで日本の現代パフォーマンスアートグループ「パパ・タラフマラ」の公演「Ship in a view」(基金助成事業)がマスコミに大々的に取り上げられ、大きな反響を呼んだ。

2. 日本との文化交流事業

2002年度に引き続いて、当地日本大使館・日系団体共催の日本文化月間「プレセンシア・デル・ハボン(日本のプレゼンス)」がメキシコシティを中心に8月から11月の4か月間にわたり大々的に催され、展覧会やコンサート、講演会や日本映画上映会など、約30の催し物が行なわれ、連日大勢の人がつめかけた。

商業映画では宮崎駿監督『千と千尋の神隠し』や北野武監督『Dolls』が公開され、大好評を博した。また国立シネマテークでは「黒澤とシェークスピア」と題した黒澤明監督特集が行なわれた。そしてメキシコ大手シネコンであるシネメックスが企画開催する現代映画国際フェスティバル(FICCO)に『沙羅双樹』(河瀬直美監督)や『アカルイミライ』(黒澤清監督)、『殺し屋1』(三池崇史監督)等の作品が出品されて好評を博すなど、多くの日本映画が紹介され、あらたな日本映画ブームが生まれつつある。

展示ではカリージョ・ヒル美術館所蔵の浮世絵展が同美術館で開催され、日本の都市工学・都市文化論を専門とするガルシア・モンティエル氏による卓越した浮世絵に関する研究調査によりキャプション説明等の充実した、レベルの高い展覧会となった。

3. メキシコ事務所の活動

<活動方針>

過去4年間で確立した事務所広報機能(広報誌「パティオ」、ホームページ)を見直し、より一層の充実をはかった。広報誌はそれまで年4回刊行していたものを3回としたが、その分表紙デザインの更新、地方の日本語教育事情、日本語教育アドバイザーによる日本語教育ページ、イベント・基金事業・文化交流特集のページを充実させた。ホームページには新たに掲示板を設置し、日本語教師や在墨日本文化人の情報交換の場として提供した。双方ともメキシコおよび他のスペイン語圏中南米諸国の日本・日本語研究機関や在外公館の間に確実に定着しつつある。

日本語分野に関しては、メキシコ日本語教師会の法人化、日本語能力試験受験者数の増加等、日々発展しつつある当地の日本語教育分野をサポートすべく、各種セミナー、研修会の実施、日本語機関調査などに事務所として積極的に関わった。

<2003年度事業例>

●「写楽展」(2003年5月6日～6月22日)

日本を代表する浮世絵作品「写楽」を多角的に捉えた作品展覧会を有力企業ブラサ・インプルサの2箇所のショッピングモ-

ルで実施し、オープニングでは展覧会に先立ち写楽にちなんだパフォーマンスを行ない大勢の観客を集めた。

●日本アニメ映画祭(2003年9月17日～21日、メキシコ国立自治大学内映画館ホセ・レプエルタス)

高橋良輔監督『沈黙の艦隊』のオープニング上映を皮切りに、ハリウッドの大ヒット映画『マトリックス』に大きな影響を与えたとされる押井守監督『攻殻機動隊』等、日本のアニメ映画作品の上映会を実施。学生や映画関係者を中心に連日多くの観客で賑わった。

●日本アニメ講演会(2004年3月11日、国立工科大学内講堂マヌエル・モレノ・トレス)

高橋良輔、指田英司両氏による「ジャパニメーション1963-2004」と題した日本アニメの講演会を実施。日本アニメ、文化に興味のある学生を中心に講演会場は満席になった。講演は日本アニメ制作の系譜、現状を映像・画像資料を交えながら非常にわかりやすく好評であった。講演会後には両専門家にサインを求める長蛇の列ができ、そのほかにもメキシコのアニメ同好会のインタビューや、一緒に写真を撮るなど、終始和やかな雰囲気であった。

ブラジル

サンパウロ日本文化センター

1. 概況

2003年のブラジルの貿易収支は、前年度を89%上回る史上最高の約250億ドルの黒字を記録した。急激な経済成長を遂げる中国にブラジルから大量の原材料や農産物が流れ込む構図となったため、ブラジル産業界にとって中国の重要性が改めて認識されることとなった。中国との関係の緊密化は文化交流にも及び、西安市の歴史文化財修復事業をブラジル側が資金面で支える試みも始められることとなった。

デザインとファッションの世界ではいくつかのブラジル製品が注目を集めたが、カンパーナ兄弟によるインテリア・デザインはその代表例である。中でもユーカリの木くずを素材とした「ファヴェーラ椅子」はニューヨーク近代美術館に所蔵されるなど高い評価を得た。一方、ビーチ・サンダルの「ハワイアナス」はカラフルで楽しいデザインで世界的なブームを巻き起こした。同社の国際部長で日系人のアンジェラ・ヒラト氏によると「このサンダルの原型は日本移民がブラジルに持ち込んだ草履にその原型がある」とのことで、ブラジルの多民族文化としての特徴が国際的な人気製品を生んだともいえる。



写楽展



日本アニメ講演会

2. 日本との文化交流事業

2003年は映画『シティ・オブ・ゴッド』の公開、ネルソン・フレイレ氏(ピアノ)やジョアン・ジルベルト氏(ボサノヴァ)の来日公演のほか、ブラジルの現代建築が専門誌で特集されるなど、日本では静かなブラジル・ブームの年となった。

一方ブラジルにおいては、戦後ブラジル移住再開50周年を記念する式典が相次いで開催され、日本各地から知事や議員らが多数来伯した。また、ブラジルへ移住した人々を描くNHKドラマ『ハルとナツ・届かなかった手紙』の制作発表が行なわれ、さらには2008年のブラジル日本移民100周年を控え記念祭典協会が発足、記念事業案が募集されるなど、例年にも増してブラジル移住を足場とした交流が目立った。

なお、外国人犯罪が社会問題化するなか、来日外国人少年刑法犯の国籍別検挙数でブラジルは全体の65%を占めている。日本へ渡航したブラジル人就業者およびその家族の滞日は定住化を含めて長期化の傾向にあり、子弟の教育や地域社会との関係構築などの面で深刻な課題を抱えている。課題克服のため既に日本各地でさまざまな試みが行なわれているが、ブラジルにおいてもブラジル日本文化協会が出稼ぎ子弟教育委員会を創設しこの問題に積極的に取り組むなど、両国双方において問題を真剣にとらえる動きが顕著となった。

3. サンパウロ日本文化センターの活動

日本文化紹介を目的とした事業を企画・実施する一方、日本文化とブラジル文化の比較や交差を取り上げる現地芸術家や文化人の企画も受け入れて実施している。ブラジル国内の文化機関からも日本文化の発信拠点として認知され、基金事業への関心のみならず、文化一般の情報提供や文化事業政策の面での助言やアドバイスの要請も高まってきている。

<2003年度事業例>

- 「**舞踏の軌跡**」(2003年9月、SESC(商業連盟社会サービス)アンシエッタ劇場/サンパウロ、サンパウロ州アララクアラ市、サントアンドレ市、サンカルロス市、リベイロンプレットの各都市におけるSESC劇場)

70年代後半にブラジルに渡った故楠野隆夫氏がブラジルにおける舞台芸術、とくに現代舞踏に与えた影響を振り返る試みとして、事業全体に「舞踏の軌跡」のタイトルを冠して舞台公演、パネル・ディスカッション、ワークショップ、写真展、ビデオ上映会を実施した。

大野慶人、笠井勲、イズマエル・イヴォ(ドイツ在住ブラジル人)、舞踏舎・天鷲、和栗由紀夫、佐々木満(ドイツから参加)、



舞踏の軌跡

ブラジル国内からは、マルタ・ソアーレス、コンパニア・タマンドゥア・デ・ダンサ・テアトロ各氏が参加し国際色豊かな事業となった。

7日間にわたる公演は毎回満席を記録し画期的な事業となった。マスコミにも好意的で充実した記事が掲載されるなど、日本の舞踏界の大御所が当地で展開した交流は大変意義深いものであった。また、派遣助成と現地での事業実施が功奏した好例ともなった。

- パパ・タラフマラ「船を見る」公演**(2003年11月、SESCピラ・マリアナ劇場/サンパウロ)

ブラジルにおける日本の舞台芸術紹介が古典芸能が舞踏に偏りがちであった中で、ダンス、演劇、美術、音楽が融合した同カンパニー独自の表現は、いわゆる日本らしさを脱した現代的で普遍的なものとして新鮮な感触をもって観客に受け止められた。

また、代表の小池博史氏らによるワークショップも好評であった。基本的な動きから参加者全員による小作品の制作・上演まで3日間にわたってさまざまなジャンルのダンサー、女優俳優らが指導を受けた。

公演およびワークショップの成功に加えて、同カンパニーとサンパウロの文化機関との間に今後の作品制作に向けた共同の可能性が開けたことも大きな収穫であった。一回限りではなく継続性を備えた交流へと発展しつつあり、さらなる関係の深化が期待される。

- 富野由悠季監督アニメ講演会**(2004年2月、リオデジャネイロ州立大学/リオデジャネイロ、3月、サンパウロ市立文化センターおよび国際交流基金サンパウロ日本文化センターホール/サンパウロ)

『機動戦士ガンダム』シリーズで著名な富野由悠季氏を迎えてリオデジャネイロとサンパウロで講演会を実施した。また、サンライズの協力を得てアニメ上映を行なったほか、現地共催者によるポスター、ガレージキットの展示なども並行実施された。

講演のテーマは「なぜ日本でロボットアニメが生まれたか？」であったが、ロボットアニメにとどまらず日本の文化の歴史的な背景やその特質に踏み込んで文化的、学術的な考察を交えた日本文化論が展開された。20代中心の観客が熱心に耳を傾け、文化紹介のみならず対日理解の促進の面でも大いに成果があった。

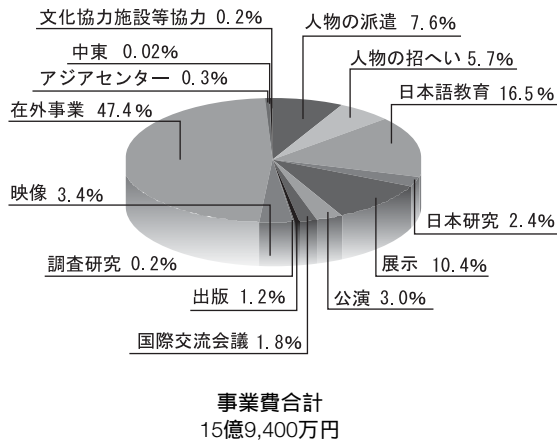
世界的なアニメ・ブームはブラジルにおいても例外ではなく、サンパウロやリオデジャネイロにおける代表的なアニメ・フェスティバルに集まるファンは数万人にも上っており、アニメやマンガを取り上げた交流事業の実施には大きな期待が寄せられている。



富野由悠季監督アニメ講演会

西欧

概要



事業費割合では、事務所関係事業(48.0%)、次いで日本語教育(16.0%)、人物交流(13.5%)が大きな割合を占めた。近年、各種周年事業が続いた西欧地域では、そのモメンタムを活かしつつ、日本との共通課題についての知的対話や、共同の新たな創作活動を重点的に支援した。

パリ日本文化会館では、「ひととロボット展」を開催し、ひととロボットをテーマに多角的な事業を展開した。からくり人形のデモンストレーションについては、イギリス、イタリアでも実施され、日本の誇る科学技術を生み出し支えてきた文化的・歴史的背景を分かりやすく伝えることに成功した。舞台芸術分野では、イタリア2都市、ドイツ3都市で、薩摩琵琶・尺八演奏会が行なわれ、地元機関との協力・連携をとりつつ、古典から現代までの曲目を演奏し、邦楽に馴染みのない観客を魅了した。

日本語教育分野においては、イギリスにおいて初等日本語教育関係者を対象にした支援が始まり、また、日本語能力試験の受験者が増加するなど、広がりをみせている。

知的交流分野においては、日欧国際会議助成プログラムを通じて、政治、経済、文科等の多様な分野における日欧間の知的交流を積極的に支援した。

海外事務所報告

フランス

パリ日本文化会館

1. 概況

政府の財政赤字の改善策の一環として失業保険などの支給条件が見直され、そのため舞台関係短期労働者(アンテルミッタンのストが行なわれ、アヴィニヨン演劇祭など大規模な文化フェスティバルが中止に追い込まれた。

2003年10月よりフランスにおける中国年として「山と奇跡：宋・金時代の伝統絵画展」(グラン・パレ)、「Chen Zen回顧展」(パレ・ド・トーキョー)などが開催された。1月には中国の正月、春節を祝うパレードがシャンゼリゼ通りで開催され、エッフェル塔が照明で赤く染め出された。

2003年度のヨーロッパ文化首都には仏北部リール市が指定され、12月のオープニングには50万人以上が集まった。2004年11月まで1年間、さまざまな文化行事が開催され、日本のアーティストも参加の予定である。

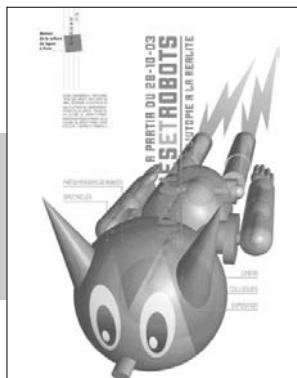
2004年3月、第3次ラファラン内閣ではルノー・ドナデュー・ド・パーブル氏が文化相に就任した。文化政策としてはヴェルサイユ宮殿美術館、ルーブル美術館に続いて、ギメ、オルセーの両美術館のステータスが2004年1月より「公的機関」に変更された。

2. 日本との文化交流事業

日本のアニメや映画は引き続き好評で、フォーラム・ド・イマージュでは「日本の新しい映像」特集が開催された。また北野武監督『座頭市』、河瀬直美監督『沙羅双樹』、宮崎駿監督『魔女の宅急便』などが一般劇場で公開された。

モンペリエダンスフェスティバルでは勅使河原三郎氏「Green」、E・クレスプール氏/岩下徹氏「うぐいす」が予定されていたが、フェスティバルはアンテルミッタンのストで中止となった。

展覧会については、2003年前半に、日本をテーマとした複数の写真展がパリおよびパリ近郊で実施された。仏文化省・写真遺産部門は、日本の戦後を代表する写真家約20名の作品170点あまりを集めた「昭和20～50年代の日本：蘇る写真展」をシュリー館にて実施した。第7回リヨン現代美術ビエンナーレでは、20世紀後半の美術界で活躍した作家の一人として草間弥生氏の作品が展示され、できやよい氏の作品も出品された。



ひととロボット展ポスター



ひととロボット展
ロボットデモンストレーション

3. パリ日本文化会館の活動

<活動方針>

今年度は「大ロボット展」の開催を主要事業として展開した。本企画に先立ち、日本国内で大ロボット展企画委員会、同実行委員会を組織し、企画に当たっては外部の有識者の意見を取り入れ、また実施面では民間企業の協賛、協力多数を得た。この事業はこれまでの課題であった、ひとつのテーマを中心に、展示・公演・シンポジウムなどいろいろな形で催しを行なう複合的の実施、外部有識者の意見を取り入れること、民間企業の協賛を得ることなどを達成することができた。

<2003年度事業例>

●複合事業「ひととロボット展」

10月下旬から1月末まで、ひととロボットをテーマに展覧会、デモンストレーション、シンポジウム、映画、公演などの事業を実施した。

展覧会「電脳空間の夢想」では、高階秀爾氏監修により、椿昇、岩井俊雄 + ばばかよ、八谷和彦、藤幡正樹 + 銅金裕二、ヤノベケンジ、立花ハジメ + 宮島達男、明和電機各氏によるロボットをテーマとした作品を展示、また現代日本の日常生活の中のロボットの側面をビデオで、日本人とロボットの関わりについての歴史的推移をパネルで紹介した。

PaPeRo、PINO、ASIMO、HOAP-2、QRIO、AIBOを紹介したロボットデモンストレーションは毎回会場が満員になる人気であった。また、日仏それぞれのロボット・コンテストの紹介、フランスチームによる実演、IDCロボコンに参加した日仏学生による対談も行ない、会館には若者が多数訪れた。

日本におけるロボットの源流として、からくり人形師九代目玉屋庄兵衛氏のからくり人形デモンストレーションと、名古屋大学大学院工学研究科教授末松良一氏による講演会も実施した。

シンポジウムは3回実施し、第1回は人間とロボットとの関係の日本と西洋との比較中心に、磯村館長が司会し、高階秀爾氏、伊東順二氏、C.ソテール氏、J.マウ氏が参加した。第2回は「ロボット：科学と文化の間」と題し、ロボットの研究開発の専門家 - 高西敦夫氏(早稲田大学教授)、北野宏明氏(ソニーコンピュータ科学研究所所長)、F.カプラン氏(ソニーコンピュータ科学研究所パリ支部所員)、ダリオ氏(サンタンナ大学教授) - が参加し、人間とロボットの共生、日欧のロボットに対する認識の相違について話し合った。第3回は「Tokyo 2004」と題し、伊東順二氏、J.サンス氏(パレ・ド・トーキョー館長)が現代日本のポップカルチャーや文化トレンドを、ロボットを切り口とし



内瀬十二景あるいは二重の影

で紹介した(司会：磯村館長)。

公演部門では、明和電機のライブ・パフォーマンスを実施した。独創的かつユーモラスな舞台を観客は楽しんだ。また、金森謙氏率いるProject Noism04による「Wall」(基金制作)においては、日本の若いコレグラファーを当地に紹介することとなった。

映画では、日本のロボット・アニメと、ドキュメンタリーを上映した。

ロボットという現在関心の高いテーマを選び、多角的に事業を展開し、テクノロジーだけでなくひととロボットの関係という文化的側面に踏み込むことによって深みと広がりのある事業となり、マスコミにも多く取り上げられた。

●能・狂言(能「翁」、狂言「鞠猿」「川上」、創作能「内瀬十二景あるいは二重の影」、新作能舞「百扇帖」ほか)

文化庁助成を受け、渡邊守章氏制作総括、観世榮夫氏、野村万作氏、野村萬斎氏ほかが出演した。2月23日～26日の4日間のプログラムで、囃子方のコンサートも実施した。

入場券が販売開始直後に売り切れる人気の高さで、当日の観客の反応も大変好評であった。一流の出演者による公演であったことが成功の主な理由であろうが、一方当地で能という舞台芸術が高く認知されてきていることが何われ、ル・モンド紙別冊文化情報誌などにも紹介された。

●市川崑監督映画特集

今までフランスでは配給ベースで6本しか紹介されていなかった市川崑監督の大規模な特集で、『ころも』『満員電車』『おはん』『どら平太』など19本の作品が上映された。岡崎宏三撮影監督が、『我輩は猫である』撮影現場や市川監督の思い出について語る特別上映会も開催した。

イタリア

ローマ日本文化会館

1. 概況

2003年下半期のEU議長国を務めたイタリアであるが、ベルルスコーニ首相が繰り返す不適切発言、また対イラク情勢に見せる米国寄りの姿勢などで、他EU諸国との軋轢が際立つ年となった。イタリア内外からの現政権への批判は強く、春の地方選挙では過半数の県で中道左派が右派を逆転し、内政においても、首相自らを免訴する裁判凍結法、中低所得者層の負担増に繋がる年金改革案、メディア寡占禁止を緩和する「ガスパリ法」などにより、第二次ベルルスコーニ政権に対する国民の不信は



市川崑監督

加速度的に高まった。

イラク戦争を巡っては、2月のローマ大反戦デモの後、各地で反戦運動が続くなか、4月にイラク派兵が決定された。11月にはナッソリアの駐留イタリア軍司令部を標的とした自爆テロ事件が勃発、19名のイタリア人兵士が犠牲となって、国中を大きな衝撃と悲嘆のうちに沈めた。

記録的猛暑の夏は2回の大停電に襲われている。とくに、復旧に最長で19時間を要した9月末の大規模ブラック・アウトは、国内ほぼ全土で大混乱を生み、電力総需要量の実に17%近くを輸入に依存する「原発なき先進国」イタリアのエネルギー問題が、危機管理問題とともに浮き彫りとなった。

経済面では、状況好転に繋がる要因は依然少なく、2003年の経済成長率は0.3%と、近年最低の成長率を記録した前年を更に下回る結果となっている。

2. 日本との文化交流事業

日伊関係は引き続き良好を保っており、姉妹都市数も年々増加して現在32を数え、イタリア国内では、各地の地方自治体などが主体となって日本文化紹介・日伊交流事業を企画するケースが目立つようになった。また、課外活動として日本語教授を行なう高等学校が一部の州で急増したのも特筆すべき点である。

日本文化に対する一般の関心は、古典文化・伝統芸能、食、漫画・アニメーション、映画、建築など、従来からイタリアで人気の高い分野に依然偏りがちであり、またマスメディアで頻繁に取り上げられる日本も、ステレオタイプを脱け出るものは少ない。しかし、各地で開催される日本祭などに目を向けると、現代日本の美術、音楽、舞台公演、文学なども好んで取り上げ、事業としても優れた企画が、僅かずつながら着実に増えている。

2003年度にイタリア国内で開催された日本関連文化事業のうち、とくに大きな話題を呼んだものとしては、2004年2月にオープニングを迎えた「浮世絵展」(ミラノ王宮・基金助成事業)や、同じく2月に、ローマ・音楽の庭アウディトリウム、ナポリ・サンカルロ劇場ほかイタリア各地主要劇場を巡回した「鼓童、和太鼓公演」が挙げられる。総計約600点の浮世絵をテーマ毎に展示した前者は、各種メディアで連日大きく紹介され、これに関連して日本特集を組むテレビ・雑誌なども多く、大評判となった。

3. ローマ日本文化会館の活動

<活動方針>

前年の開館40周年に企画された各種大型記念事業などを通じて、大きな拡がりを見せたイタリア市民の日本文化への関心を維持し、一層拡充して日本理解の促進に努め、更には日伊が手を取り合って共通課題に取り組んだり、共同で新たな芸術を創作したりする動きをとくに支援することを目指した。

事業計画にあたっては、古典芸能など当国で人気の高い分野の事業を通して日本に興味を持つ層を更に広げると同時に、長い伝統の上に育まれた日本の優れた現代文化を、その背景とともに積極的に紹介して、生きた現代日本社会の姿をさまざまな面から伝えること、多様化するイタリア人学習者のニーズに応え得る適切な日本語教育を支援すること、研究者間のネットワーク強化や交流促進に努め、持続的かつ現代的な日本研究を進めること、広範な分野における日伊対話の機会を多く創出することを目指した。同時に、各地域毎の文化的独自性を十分考慮に入れて、イタリア全国を対象に事業を展開することを心掛けた。その地に根ざして活動を行なっている芸術家と協力し、また、在ミラノ総領事館、あるいは各地の劇場、映画館、美術館、大学や各種フェスティバル等関連機関と連携して、ローマ以外の地においても数多くの事業を行なうことができたのは、2003年度の成果のひとつであった。

<2003年度事業例>

- 「Mini case in Giappone : 日本の小さな住宅展」(2003年10月10日～12月12日、ローマ日本文化会館展示ホール/ローマ)

日本の大都市空間の中で限られたスペースを最大限に利用して住宅を建てるにあたり、7名の若手日本人建築家がそれぞれに編み出した設計プランや素材のアイデアを、模型、パネル、動画プログラムを用いて紹介した建築展である。キュレーションは、ドイツ人建築家のハンネス・レスラー氏、出展は、日本で活躍中の30代の建築家である、アトリエ・ワン、フォブ・アソシエーション、西沢大良、奥山信一、若松均、佐藤光彦、玉置順の各氏。従来日本の建築はイタリアにおいて高い評価と人気を集めているが、今日の日本人が実際に住の場としている一般住宅建築が紹介される機会は稀少であるため、専門家や建築を学ぶ学生たちの注目を浴びた。加えて、一般市民からも、日本人の美意識、生活習慣、住環境に対する姿勢などを垣間見ることのできる楽しいプロジェクトとして好評を博し、加えてコンピュータを駆使して制作した美しい立体映像によるプレゼンテーションも功を奏し、幅広い層に高い関心を呼び起こした。総来場者数は1,500名を超え、続編企画を望む声も多く寄せられた。



Mini case in Giappone : 日本の小さな住宅展



からくり人形 レクチャー・デモンストレーション
弓曳童子実演

- ・「日本のロボット」レクチャー・デモンストレーション、「からくり人形」レクチャー・デモンストレーション(2003年6月25日～28日・2004年1月22日、ローマ日本文化会館展示ホール・講堂/ローマ)

ロボットとからくり人形の両方を同年度内に紹介することにより、日本の誇る科学技術を生み出し、支えてきた文化的・歴史的背景を、わかりやすくイタリア人に伝えようとした試みである。6月の「日本のロボット」レクチャー・デモンストレーション(在イタリア日本大使館と共催)では、高西淳夫早稲田大学ヒューマノイド研究所教授による講演、AIBO、PINO、PAROの3種のロボットの実演、写真パネル展示により、一方、1月の「からくり人形」レクチャー・デモンストレーションにおいては、末松良一名古屋大学大学院教授の講演、九代目玉屋庄兵衛氏による弓曳童子、茶運び人形、猪口運び亀の実演、写真パネル展示を通して、それぞれの歴史、構造や最新事情について総合的な紹介を行なった。「日本のロボット」レクチャー・デモンストレーションは、イタリアでも注目度の極めて高い日本の最先端ロボットの实演が見られるとして事前から大きな評判を呼び、3日間の会期中に多数の児童を含む520余名が殺到、また、「からくり人形」レクチャー・デモンストレーションにも1晩で200名近くの観衆が集まり、どちらにおいても、実演に見られる愛らしい動きとユニークな発想、高度な技術に感嘆の声があがった。日本の現代文化と江戸文化を有機的に結び付けて紹介したセット企画により、テクノロジーの水準の高さばかりが強調されがちな日本のロボットが、実は長い歴史をその内に備え、日本文化のエッセンスである豊かな遊び心と寛容なやさしさを具現したものであることを知ったとの評を得た。

- ・「和菓子」レクチャー・デモンストレーション(2003年11月27日～29日、ローマ日本文化会館講堂・ラツィオ州国立第一ホテルマン調理師養成専門学校大教室/ローマ)

近年イタリアで大ブームを起こしている日本食に関連した企画を、という多くの強い要望に応え、食の中では意外にもまだほとんど知られていない「五感で味わう」和菓子の世界を紹介した。文化会館で一般を対象に3回、調理師養成専門学校(中等教育機関)で学生を対象に1回、講義と実演を開催したところ、広報を始めた途端に予約が埋まる人気を見せ、日本に関心を持つ層の拡充に大きく貢献した。各回とも、まずは、株式会社虎屋・虎屋文庫の中山圭子氏が、目を見張る美しさの干菓子や珍しい道具、たくさんの写真、スライドを見せながら、歴史、成り立ち、種類、材料や製法などあらゆる面から、和菓子の魅力について歯切れ良くわかりやすい解説を行ない、続いて、同社の和菓子職人、持田昌利氏と宮本友子氏、虎屋フランスの吉田太氏が、観衆の目の前で各種生菓子を次々に制作して見せた。ただの餡の塊があっという間に椿や紅葉、林檎などの形に姿を

変えて、繊細な美しい和菓子上がっていく様子に、満席の観衆はただ息を飲んで見入り、「魔法の手」と賞賛が飛んだ。最後は、観衆も参加して「きんとん製・もみじがさね」を苦勞しながら試作、お茶とともに、大喜びで日本の味に舌鼓を打つ人々からは、「日本人の感性や思考方法、生活態度全般について考えさせられることが多くあり、和菓子は日本文化そのものだと感じた」、「イタリア人好みの『食』と『美』にスポットを当て、日本の文化と歴史をおしゃれに解説した非常に良質な事業。ぜひ定期的な開催を」といった声が聞かれた。

ドイツ

ケルン日本文化会館

1. 概況

2003年3月の議会演説でシュレーダー首相は、少子高齢化による社会保障制度の財政難、経済の低成長、400万人を超える失業者問題などに対処するため、制度の弾力化と自己意識の強化を図り、経済を成長軌道に乗せることが目的の包括的改革プログラム「アジェンダ2010」を発表した。

外交面では、2002年夏にシュレーダー首相が、米主導の対イラク武力行使に不参加の声明を発表して以来、米国との関係が冷却化していた。戦後の復興支援でも当初ドイツは欧州連合(EU)拠出金の自国負担分以外は支援しないと表明していたが、後にフィッシャー外相が世界銀行などの経由分を含めて合計1億9,310万ユーロまでの支援を発表した。また人的支援として、イラク刑事警察の訓練を行ない、医療関係緊急輸送機派遣を検討する意向を示し、米国との関係は改善しつつある。

教育面では、大学改革の一環で制度の国際化が進行している。一つは、若く有能な研究者に正教授の道を開くジュニア・プロフェッサー制度が昨年から導入され、30代初めの学者にも学内での独自の研究と教育の実践が可能となった。ブルマン教育大臣の中間発表によると、2003年には353人のジュニア・プロフェッサーが誕生している。改革のもう一つの目玉は、外国での就職時の有効度の向上、就学期間の短期化、若く柔軟な知的労働力の確保を目的として、国際的に通用する学士/修士号制度が導入され、2003年初めには、全国の15%にあたる1,600学科で新制度に移行した。

文化面では、連邦大統領府内文化大臣クリスティーナ・ヴァイス氏により、2003年初めに連邦文化基金と各州文化基金の統合が合意され、2004年1月から発効になる予定であったが、各州側の反発により難航している(2003年予算として前者は2,560万ユーロ、後者は各州に820万ユーロ)。連邦文化基金の2003年



日本のロボット レクチャー・デモンストレーション
PINO



和菓子 レクチャー・デモンストレーション

プロジェクトの四大重点は、「文化と都市」「文化におけるドイツ統合」「9.11テロに対する米国の挑戦」「東欧」であり東欧プロジェクトの一環として、2003 - 2004年は「ドイツ・ロシア：文化の出会い」年として、両国30都市で350の催しが行なわれている。

2. 日本との文化交流

ボンの連邦美術展示館にて、室町から江戸時代にかけての日本美術を概観する「日本の美、日本の心展」(8～10月、東京国立博物館所蔵品展)が開催され、約9万7,000人の来館者を集め好評を博した(基金は関連企画の能公演に助成、日本建築講演会を共催)。一方で、「草間彌生展」(11～2月、基金助成事業)と「河原温展」(3～4月)が、ニーダーザクセン州ブラウンシュヴァイクのHaus Salve Hospesで行なわれるなど、現代美術作家の紹介もなされ、幅広い範囲での日本関連事業が引き続き行なわれた。

映像分野では、黒澤明氏に関する展覧会(10～1月、フランクフルト映画博物館、基金助成事業)とシンポジウム(11月、ジューゲン大学、基金助成事業)が実施され、ベルリン国際映画祭では、昨年に続き日本人監督特集(清水宏氏、基金主催事業)が組まれ、同特集は、文化会館のほか香港国際映画祭でも上映された。また、数十本の映画上映を中心に日本文化を紹介するニッポン・コネクションは第3回を迎え、約1万5,000人を動員した。アニメ、漫画の人気はさらに高まっており、マンガ雑誌数も増加した。

舞台芸術分野では、依然、和太鼓に関心が集まっており、各地で公演が行なわれている。また、舞踏家・土方巽氏の写真展が開催され、対外関係研究所(ifa)のシュトゥットガルト、ボン、ベルリンの各ギャラリーにて巡回展示がなされた。

日本研究・日本語教育分野では、各州政府の財政上の理由から教育関連事業の合理化が進められており厳しい状況にあるが、日本語能力試験の応募者数は、ここ数年の500名台から、はじめて700名台を記録した。

3. ケルン日本文化会館の活動

<活動方針>

1999年の「ドイツにおける日本年」、2002年サッカー・ワールドカップ日韓共同開催関連企画などを通じて培われた日独交流の momentum を活かしながら、日本に対する関心を高めるだけでなく、相互理解を一層深めるため、若い世代をターゲットとした文化事業の実施、日独共同事業の展開、各地方とのネッ

トワーク強化、ドイツ語圏の日本語教育支援などに重点をおき、効率的な事業を実施した。

<2003年度事業例>

●「ジャクリーヌ・メルツ / 津田睦美：日独作家対話展」(2003年10～12月、ケルン日本文化会館)

スイス出身でドレスデンを拠点とする写真家ジャクリーヌ・メルツ氏と、フランスでも長年活動していた津田睦美氏(成安造形大学助教授)による現代美術展。メルツ氏は2001年に初めて日本を訪れた際に制作した作品により、津田氏は広島原爆ドーム周辺や米国でお土産として売られていた「原爆グッズ」をモチーフにした作品によって、「現代日本」を表現。オープニングでは、デュモン出版社芸術部門代表のマリア・ブラット氏が解説を行ない、地元新聞などにも取り上げられた。「美術館の長い夜」という、ケルン市内の美術館が11月の第1土曜日の17時から翌日3時まで開館するイベント時には、約1,200人が文化会館を訪れた。

●「薩摩琵琶・尺八演奏会」(2003年6月、ケルンほか計5都市に巡回)

半田淳子氏(薩摩琵琶、歌)と田嶋直士氏(尺八)が、古典(平家物語)から現代(武満徹氏、半田淳子氏、前田智子氏)までの曲目を演奏。本公演はケルン市において88年より隔年夏に開催されている「ロマネスクの夏」という宗教音楽祭からの出演依頼を端緒に企画され、ローマ、ミラノ(以上イタリア)、デュッセルドルフ、ケルン、ミュンヘン(以上ドイツ)を巡回した。とくに、ケルンでの公演は、ドイツ側企画行事への参加事業であったため邦楽に馴染みのない多数の人々に紹介できた点、聖マリア・イム・カピトル教会での公演の様子が西ドイツ放送のラジオで生放送された点で、その意義は極めて大きい。日本側の単独企画ではなく、地元の行事に参加するなどして、地元機関との協力・連携をさらに強化することの重要性を確認する事業となった。

●「小川洋子朗読会」(2003年9月、ケルン日本文化会館)

ドイツで過去2年間に『ホテル・アイリス』『妊娠カレンダー』および『薬指の標本』のドイツ語翻訳が出版され、新聞などにも書評が紹介された小川洋子氏による朗読会。小川氏による『薬指の標本』の日本語朗読、ドイツ人声優によるドイツ語朗読、司会者と作家の対話形式の質疑応答、一般聴衆との質疑応答があり、作家の文学観、関心、執筆に対する姿勢などを知ることのできる非常に聞き応えのある催しとなった。本朗読会はその後、ベルリン国際文学フェスティバルや、ベルリン・フンボルト大学内森鷗外記念館、さらにフランスの数箇所でも実施された。なおドイツにおける日本文学振興のための事業としては、ドイツ語図書における優秀な日本語訳を顕彰する「国際交流基金翻訳賞」の授与も行なっている。



薩摩琵琶・尺八演奏会



小川洋子朗読会

英国

ロンドン事務所

1. 概況

米国の欧州における最大の同盟国として対イラク戦争に踏み切った英国にとって、政治的に多難といえる一年であった。2003年2月にロンドンで行なわれた英国史上最大規模の反戦デモを皮切りに、全国各地で大規模な反戦デモが行なわれ、英国中に強い反戦ムードが巻き起こった。政府は、世論の強い反対を押し切って、同年3月、米軍とともにイラクに対する軍事行動を開始し、翌月にはイラクほぼ全域の掌握、フセイン政権の崩壊を見たが、戦争の大義名分を得るため政府がイラクの大量破壊兵器に関する情報を操作し、イラクの脅威を誇張したとされる疑惑を通じて、政府に対する国民の不信感やブレア首相の退陣を求める声が急速に高まるなど、ブレア政権は1997年の発足以来、最大の窮地に立たされることとなった。また、ユーロ導入や医療、教育制度改革などの諸問題においても、ブレア首相の指導力を問う声が野党のみならず与党労働党内でも強まりつつあった。

文化面において最も注目を集めた出来事は、2008年の欧州文化首都として、イングランド北西部の都市リバプールが選ばれたことであった。欧州文化首都は、EU加盟国が2005年から持ち回りで自国の都市を指名し、一年間、欧州文化の中心地とする制度であるが、ブリストル、カーディフ、ニューカッスル、オックスフォードといった並み居るライバルとの激しい指名争いを勝ち抜いたリバプールでは、芸術、建築、演劇、文学、科学などのあらゆる分野において年間を通じてさまざまな事業が行なわれる計画であり、同市の観光、投資、雇用の促進に大きく寄与するとみられている。

2. 日本との文化交流事業

2001年度に英国全土で実施された大型日本文化紹介事業「Japan 2001」を契機に、英国人の日本文化や社会に対する関心は確実な高まりを見せ、地方レベルでも日本文化紹介事業が盛んに催されるなど、わが国と英国の文化交流は全般的に良好な状況にある。

2003年度に行なわれた主要な日本文化紹介事業として、英国演劇界の鬼才サイモン・マクパーニー氏(劇団テアトル・ド・コンプリシテ芸術監督)が世田谷パブリック・シアターと共同制作した、日本人俳優起用のフィジカル・シアター“The Elephant Vanishes”(原作は村上春樹著『象の消滅』)、アルメイ

ダ劇場前芸術監督のジョナサン・ケント氏が演出し、狂言師野村萬斎氏が主演した、日本人俳優のみによる日本語劇“Hamlet”、舞踏家・振付家として世界的に著名な勅使河原三郎氏がダンスカンパニー“KARAS”を率いて、全盲の英国人舞踏家、スチュアート・ジャクソン氏と共演した、光と音と舞踏のコラボレーション“Luminous”などが話題を呼んだ。また、英国において毎年開催されている「ロンドン国際映画祭」では、北野武監督『座頭市』をはじめ国際的評価の高い新作が、そして「レイダンス映画祭」では、知名度はさほど高くないものの実力のある作品が多数上映され、それぞれ観客やメディアの好評を博した。

3. ロンドン事務所の活動

<活動方針>

2003年度においては、「Japan 2001」を通じて英国全土で芽生えた日本文化や社会に対する関心をいかに持続的に高めていくかが最大の課題であった。事業件数の点では、「Japan 2001」が実施された2001年度には遠く及ばないものの、対前年度比で増加傾向にあり、英国における多様なレベルでの対日関心や日英文化交流の芽を絶やさぬよう、とくに地方での事業展開や伝統文化と現代文化との事業のバランスに留意しつつ、日本文化紹介事業を積極的に支援するよう心掛けた。また、日本研究の分野においては、若手・中堅の学者・研究者にわが国での研究の機会が提供されるよう、そして日英間の知的対話が一層促進されるよう努めた。

日本語教育分野では、中等教育レベルの日本語教育支援を中心としつつも、当地政府の初等教育レベルにおける語学教育強化政策の発表を受けて、今後、初等教育レベル向けにどのような支援を行なっていくかを検討するため、同レベルにおける日本語教育の実態調査を行なった。また、とくに初等・中等教育レベルにおいては、語学教育と文化・社会紹介が密接につながっていることが多いことから、学校訪問などに際しては、日本文化紹介を行なっている機関(Japan 21や在英大使館広報文化センターなど)と連携し、日本文化紹介・日本語導入のプログラムを共同で実施することにより、より効率的な事業展開を目指した。

<2003年度事業例>

●“Ready Steady NihonGO! Project” 調査事業(2003年4月～2004年3月)

英国政府による初等教育レベルにおける語学教育強化の動向を受けて、同レベルにおける日本語教育現状調査“Ready Steady NihonGO! Project” 調査事業を実施した。調査の一環とし



からくり人形レクチャー・デモンストレーション
(玉屋庄兵衛氏)

で行なった全英の小学校に対するアンケートや、日本語を導入している小学校の現場訪問から、現在、日本語教育が導入されている約30校の小学校における日本語教育の実態や、今後日本語を導入したいとする学校の動きを把握することが可能となった。また、2003年9月には、初等日本語教育関係者を集めての情報交換・ネットワーク形成のための会合を持ち、また、11月には本調査の経過報告と初等日本語教育の実際を体験するワークショップを行なった。

●「からくり人形」 レクチャー・デモンストレーション(2004年 1月17日、大英博物館/ロンドン 1月19日、Museum of Childhood、City Arts Centre/エディンバラ)

からくり人形師九代目玉屋庄兵衛氏、名古屋大学教授末松良一氏による日本のからくり人形に関する講演および実演を大英博物館、Museum of Childhood、City Arts Centreの3会場において実施し、子供から大人まで約500人の参加者を集めた。からくり人形の精密な仕掛や精巧な動き、そして日本人の技術に対する探究心に驚きと関心を示した参加者が多かったが、とりわけ、からくり人形の実演に対する人気は高く、計8回の実演では毎回会場が埋め尽くされる程の大盛況であった。

●海外日本映画祭(2004年3月7日～18日、Birmingham Screen Festival/バーミンガム、Watershed Media Centre/ブリストル、Showroom/シェフィールド)

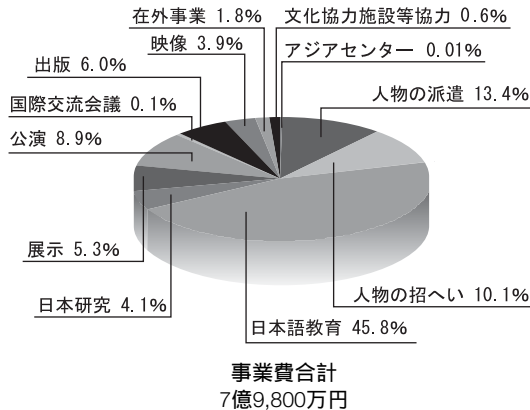
黒澤清監督『Cure』、是枝裕和監督『ディスタンス』、河瀬直美監督『につつまれて』など、日本人のアイデンティティと他者との関係性をテーマとして1990年代の秀作映画7本を英国バーミンガム、ブリストル、シェフィールドの3都市において巡回上映した。各作品の観客、BBCや『ガーディアン』紙といった主要メディアから高い評価を得ただけでなく、従来、日本映画が紹介される機会が少なかった地方都市での映画祭を実現することができた。



からくり人形 レクチャー・デモンストレーションにて AIBOも紹介

東欧

概要



東欧地域は例年、人物交流と日本語教育の2分野の比重が高いが、今年度はその傾向が一層顕著となり、全実績額の62.5%を占めるに至った。

2004年のEUへの新規加盟を目前にして、さまざまな分野における中東欧諸国の動きが活発になるなか、日本文化紹介事業、日本語教育事業などに重点をおいた。

映像分野では、東欧巡回現代日本映画祭を、ハンガリー、セルビア・モンテネグロで行ない、若手映画監督作品を上映したところ、各上映ともほぼ満席で好評のうちに幕を閉じた。また、ロシアの4都市で行なわれた日本映画祭では、現代映画と古典映画を組み合わせることで上映したところ、若者を中心に好評を博した。

舞台芸術分野では、「ロシアにおける日本文化フェスティバル2003」を契機に、「H.アール・カオス」によるコンテンポラリー・ダンス公演をモスクワおよびサンクトペテルブルグで計4回実施し、各種マスコミでも取上げられ、絶賛された。

当該地域の日本語教育熱が高まるなか、東欧唯一の基金事務所であるブダペスト事務所に駐在する日本語教育アドバイザーは、ハンガリー国内での機関訪問に加え、ルーマニアおよびクロアチアへの出張指導を行なった。また、日本からの講師を招へいた日本語教育巡回セミナーでは、ハンガリー国内のみならず、クロアチア、セルビア・モンテネグロ、ルーマニアから日本語教師が参加し、中東欧域内での日本語教師間の交流を促進した。

海外事務所報告

ハンガリー

ブダペスト事務所

1. 概況

体制転換による民主化より10年以上を経て、ハンガリーにおける社会基盤は整備され、社会的、経済的にも落ち着きをみせている。携帯電話、衛星テレビ、インターネットなどの普及により、情報の交換が容易かつ大量におこなわれるようになり、人・物の移動も充実してきている。ブダペスト市内には、大型ショッピングモールや高級ホテルが建ち、日本からの観光客も増加してきている。

一方、政治の動きとしては、2002年4月の総選挙の結果、5月からハンガリー社会党と自由民主連盟の中道左派連立政権が発足した。民主化直後の1990年の選挙ではハンガリー民主フォーラムが、1994年は社会党が、1998年はフィデス・ハンガリー市民党が勝利し、総選挙のたびに毎回主要政権などが変わってきていたが、2002年もハンガリー国民は政権党に満足せず、変化を希望した形となった。

経済面では、2002年度のGNPは537億200万ドル(世銀)、2001年～2002年の経済成長率は3.5%(OECD)、2002年度の失業率は5.6%(OECD)となっている。

ブダペストや、地方都市で毎年開催される大型イベントに加え、音楽機関の催すコンサート、各種展覧会の開催など多くの文化イベントが通年開催されており、文化都市としてのハンガリー、ブダペストの存在も確立されてきている。

2004年5月には、10か国がEUに新規加盟するが、中東欧からはハンガリー、ポーランド、チェコ、スロバキア、スロヴェニアの5か国が加盟を承認されている。また、クロアチア、ルーマニア、ブルガリア、セルビア・モンテネグロなどもEU加盟に意欲を見せており、先にEU入りする5か国も含め、今後も中東欧地域が経済的、社会的、文化的に成長していき、重要度も増していくことが予想される。

2. 日本との文化交流事業

ハンガリーにおける日本理解の新しい動きとしては、若者層を中心に、電子メディアの普及による日本のポップカルチャーに対する関心の急速な高まりが挙げられる。また、日本映画の商業ベース配給も年に数作品は行なわれるようになってきた。

一方、柔道、空手、剣道、合気道などの武道や、宗教(仏教、禅)、茶道、華道、盆栽、俳句、邦楽などを通じての、伝統的な日本文化への関心も依然として高く、両者とも、単に表層的な理解だけでなく、文化の背景となっている日本人の精神性に近づこうとする者が多い。

日系企業の工場設置や投資という形でのハンガリー進出は、市民の日本への接触機会を増し、駐在員家族、観光客、留学生な

どのハンガリーに滞在する日本人の増加は、直接的な人のつながりを生み、理解の広がり支えとなっている。とくに、リスト音楽院では、多くの日本人音楽留学生たちが研鑽の日々を送っている。

国際協力機構からハンガリーには、2004年3月現在18名の青年海外協力隊員が派遣されており、うち9名が日本語教師である。ハンガリーでは初等・中等レベルの日本語教育が盛んであることが特徴的であるが、過去10年以上にわたり、代々の隊員たちがハンガリーの日本語教育を支えている。また、武道やスポーツなどを通じて多くの隊員たちがハンガリーの人々、子どもたちと生身の交流を行なっている。

地方自治体同士の姉妹都市交流も締結されており、学校、自治体などを介して交流事業、イベントなどが行なわれている。

日本ハンガリー友好協会は、1987年設立当初の20名のメンバーから現在では600名以上の会員を擁する組織に成長し、各種イベントを継続実施している。

3. ブダペスト事務所の活動

<活動方針>

広域事務所として、ハンガリーのみならず、広く中東欧地域と日本との文化交流活動の支援を行なった。中東欧諸国にとって、2003年は大きな変化の時期であったが、そのなかで日本に対する関心も高まっており、それらの関心にどれくらい応えることができ、またこの好機を逃さずに積極的に事業を実施していくことができるかが問われる期間と認識し、可能な限り事業を行なった。

一方、日本文化に現時点で十分な関心を持っていない層へのアピールを念頭に置き、事務所図書館の拡充、小規模講演事業、日本語教室運営なども実施した。

また、近隣の在外公館とも密接に連絡をとり、情報提供、事業の巡回実施を行なったほか、事務所所蔵のパネル展の巡回展示や日本映画祭の巡回などを企画、実施した。また、事務所に派遣されている日本語教育アドバイザーを、積極的に周辺国に出張させ、情報を収集するとともに、事務所の存在をアピールするよう心がけた。

<2003年度事業例>

●津軽三味線デモンストレーション・公演(2003年9月20日、リスト記念館コンサートホール、21日、ドナウ・パロタ劇場ホール)

世界的に活躍する日本を代表する演奏家である佐藤道弘氏と、次代を担う演奏家として期待されている佐藤道芳氏というふたりの三味線奏者に、箏の海寶幸子氏、タブラの吉見征樹氏が加わり、日本の伝統楽器の魅力を紹介した。

20日は定員130名程度の会場に200名近くが来場し、超満員となった。曲の演奏と楽器の紹介、質疑応答があったが、多くの質問希望者があり、全員の質問を受けることができないほどであった。

21日は定員の300席が満席となり、立ち見を入れて350名程度

が来場した。公演の途中からも拍手の渦がいつまでも続き、進行役が客席をしずめてから次の曲に進む場面もあった。最後の曲の終了後も拍手は鳴り止まず、観客は日本の音楽を楽しんだ。

観客からは「津軽三味線の技術と音色に感激した」「琴は初めて見たが、とても繊細でロマンチックな音を出す楽器で感動した」などのコメントが寄せられ、大成功のデモンストレーション・公演となった。

●「心の在り処：日本現代美術展」(2003年12月19日～2004年2月8日、ルードヴィヒ美術館ブダペスト)

埼玉県立近代美術館の前山裕司学芸員を企画に迎え、ルードヴィヒ美術館ブダペストと共催で、日本の現代美術を紹介する展覧会を開催した。藤本由紀夫氏、畠山直哉氏、池田爆発郎氏、みかんぐみ、三田村光土里氏、村上隆氏、須田悦弘氏、高柳恵里氏、田中功起氏、月岡彩氏、やなぎみわ氏の11組の作家が出展した。

数多くのメディアで紹介され、開館40日間で、6,360名の入場があった。来場者へのアンケートでは、展覧会に満足した観客43%、たいへん満足した観客26%。回答者の63%がこれまでに日本の現代美術を見たことがなかったと回答。そのほか、コメントとして、この種の展覧会を続けて開催して欲しいというものが多い。多数であった。

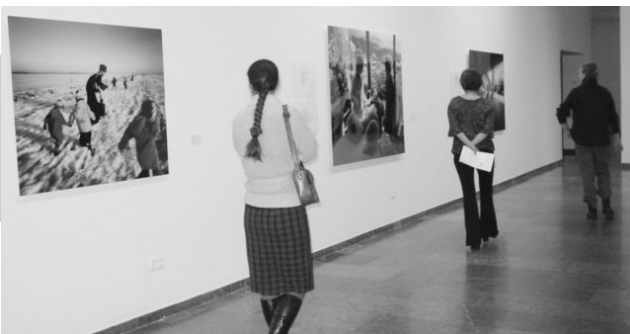
●「Project Noism04」ダンス公演(2004年1月30日、31日、トラフォ劇場)

日本を代表する若手ダンサー・振付師である金森穰氏率いる「Project Noism04」のダンス公演を行なった。両公演日とも、約300席の客席は満席となり、通路、前部に敷席を用意して、約350名の観客が鑑賞した。ハンガリーを代表するコンテンポラリー舞台芸術劇場での公演であり、来場者も目の肥えた観客が多い中、公演後は拍手が鳴り止まず、たいへん高い評価を得、大成功の公演であった。

●現代日本映画祭(2004年2月7日～13日、ウラニア映画館)

現代日本の若手監督の作品9作品(うち、SABU監督作品4作品)を、ハンガリーを代表する映画館であるウラニア映画館にて上映。SABU監督をブダペストに招き、オープニングおよび翌日のフリートークに参加いただいた。SABU監督はインタビューも多数受け、新聞、雑誌、テレビ、メールマガジンなど多くのメディアで紹介された。オープニングでは、SABU監督、稲川照芳在ハンガリー日本大使、コーシャ・フェレンツハンガリー国会議員(映画監督)が挨拶をし、SABU監督作品『DRIVE』の上映を行なった。同オープニングが行なわれた映画館大ホールの定員は450名程度であったが、ほぼ満席の状態、その後も各上映ともほぼ満席でたいへん好評のうちに幕を閉じた。来場者へのアンケート調査では、92%が「満足」、8%が「ある程度満足」(あわせ100%が満足)との結果が出、「もっと長い期間してほしい」「好評でチケットが取れないので対策を立てて欲しい(有料にしてはどうか)」などのコメントがあった。

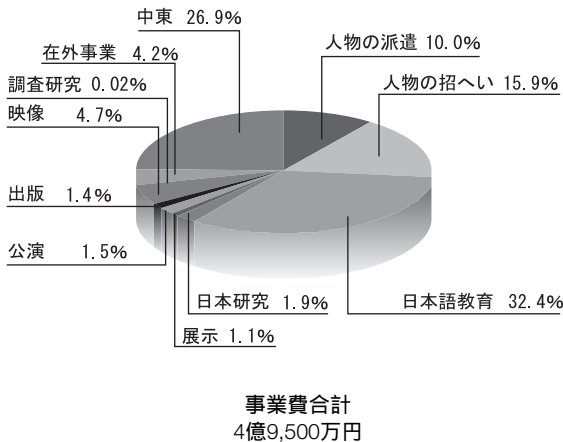
なお、本映画祭は、ブダペストでの開催後、規模を縮小し、セルビア・モンテネグロへ巡回された。



心の在り処：日本現代美術展

中近東・北アフリカ

概要



2003年度に対中近東・北アフリカ向け事業に充当された事業費は4億9,500万円前で前年度と比べ約1億4,000万円増となった。

全実績額のほぼ3分の1を占めるのは日本語に関わる事業(33.2%)で、次いで人物交流(26.9%)の2分野において全事業額の6割に達する。

日本文化紹介、芸術交流分野においては、『おしん』のイラクとアフガニスタンにおけるテレビ放送、『すずらん』のエジプトとシリアにおけるテレビ放送を行なうことで、親日観を醸成した。また、生け花(アルジェリア、スーダン、バーレーン)、琉球舞踊中東公演(シリア、レバノン、バーレーン)事業を中東諸国を巡回して行ない、好評を博した。出版翻訳分野では、瀬戸内寂聴『源氏物語』、鴨長明『方丈記』のアラビア語翻訳を行ない、日本の古典に対する理解を促す契機となった。

知的交流分野では、対中東地域・文化交流対話ミッションをサウジアラビア、イラン、シリア、エジプトに派遣し、双方の有識者が有意義な意見交換を行ない、相互理解を促し更なる知的交流の場につなげた。また日本語教育分野では、カイロ事務所の日本語教育アドバイザーが、広域的な活動を行ない、地域のネットワーク促進に貢献した。

日本国内では、「イラクを知ろう」「イスラムが問題なのか？ 近代化との関係を考える」のテーマで一般の社会人などを対象に中東理解講座を行ない、幅広い年齢層、職種の市民の中東に対する理解を促した。

海外事務所報告

エジプト

カイロ事務所

1. 概況

エジプトは、元来中東アフリカ地域の要衝として重要性を持つ国であるが、とくにアラブ世界においては、政治・外交に加えて文化、情報、学術の面でも影響力を有する、地域のリーダーである。イスラムの世界でも、カイロにはスンニ派イスラム教学の最高権威たるアズハル機構が存在し、世界各地からイスラムを学ぶ留学生を受け入れているなど、エジプトは重要な役割を果たしている。

内政面では、ムバラク政権が安定を維持しているが、90年代以降の市場経済化へ向けた経済構造改革で経済は一定の進展を見せたものの、貧富の差や失業問題は解決されず、経済的機会に恵まれない多くの若者には社会への失望や閉塞感が広がっている。そうした社会を背景に、大衆のイスラム回帰現象は、ここ20～30年の間で着実に進んでいる。欧米的な生活文化の物質的要素はさまざまに流入し続けているが、そうした表層の下で、貧しい庶民層や社会の現状に不満を持つ学生・大卒者らの間に、イスラム回帰の心情は根強く広がっている。

経済問題は、2003年の最大の国内問題となった。2003年1月末のエジプト・ポンド切下げに端を発した諸物価の急上昇は、国民生活を圧迫している。

また、2003年11月にはムバラク大統領の健康問題が浮上、前年に大統領の次男が与党の要職に抜擢されたことと絡めて、後継問題がにわかに関心を集めるようになった。

米国とその同盟国による2003年の対イラク武力行使、その後のイラク占領は、エジプト国民の米国への反感を激化させた。イラクをめぐる米国を支持し協力する日本に対しても批判が広がったが、元来親日的なエジプトで市民レベルから公然と日本批判の声が聞かれたのは異例であり、我が国として軽視できないことである。批判には誤解や知識不足に基づいたものも多く、アラブ世界との相互理解と交流の重要性がこれまで以上に高まっている。

2. 日本との文化交流事業

30年以上の伝統を有するエジプトの日本語教育は、安定した発展の道を歩んでいる。先駆的存在であるカイロ大学文学部の日本語日本文学科では、2003年、同学科出身の生え抜きのエジプト人教官が初めて正教授に昇任し、正式の学科長となった。1974年に設立されたアラブ地域最初の日本語専攻コースである同学科は、設立後29年を経て自立の過程を完全に終えたといえよう。

一方、外国語教育の名門であるアイン・シャムス大学外国語学部にて2000年に開設された日本語学科は、優秀な学生を集め、高い成果が期待されている。

社会科学分野では、カイロ大学政治経済学部アジア研究センターが、日本の外交政策に関する研究プロジェクトとシンポジウム(基金助成対象)を実施した。同学部は当国のエリート学部で、社会的影響力や政策立案者との関係も強く、ここでの現代日本研究を始める動きは注目に値する。

日本文化紹介の分野では、2002年度に続き、2003年度もNHKドラマ『すずらん』のエジプト国営TVでの再放送が地方チャンネルなどで行なわれ、親日感醸成に効果を発揮している。一般エジプト人は、日本に対して、固有の伝統と近代化をうまく共存させている国との好印象を持っているが、日本についての具体的知識は乏しい。とくに現代日本の理解に役立つ文化紹介のニーズは大きい。

3. カイロ事務所の活動

<活動方針>

2003年度は、対エジプト事業における重点項目となっている知的交流や社会科学分野の日本研究を促進するため、カイロ大政治経済学部におけるシンポジウムへの協力や、同学部での日本人学者の講義など、新たな働きかけを開始した。また、翻訳出版の促進については調査に基づき新事業の企画立案を行なった。いずれも、次年度以降のための布石であり、中長期的に大きな意義と効果につながるものである。

エジプト国内での日本文化紹介活動では、現代日本の芸術文化活動と伝統文化の両方を紹介し、日本文化の多彩な魅力を伝えるよう努めた。また、これまで事業は首都カイロに集中しがちであったが、エジプト第2の都市であるアレクサンドリアが、県政改革や新文化施設設立により文化面でも活況を呈しているのを受け、2003年度からはアレクサンドリアでの日本文化紹介事業を増加させた。日本語教育分野では、従来に引き続き国内

の拠点への支援と、中東地域内の日本語教育関係者ネットワーク化に取り組むとともに、カイロ事務所で行なう日本語教師養成事業を強化するなど、着実な活動を目指した。

<2003年度事業例>

●電子メディア音楽：日本エジプト共同コンサート(2003年6月15日)

エジプト人の現代作曲家・指揮者のM.アブデル=ワッハーブ氏と3人の若手日本人現代作曲家が、映像やコンピューター・ミュージックを取り入れた現代音楽作品の新作をそれぞれ作曲し、カイロ交響楽団が演奏する、日本・エジプト両国の音楽家のコラボレーション・プロジェクト。日本側の作曲家として、山本裕之、三輪真弘、宮木朝子の3氏が参加、また、ビデオ・アーティストの兼子昭彦氏も映像制作のため加わった。事務所は、エジプト人作曲家および会場を提供したカイロ・オペラハウスと協力し、本プロジェクトの実行を支えた。

エジプトでは現代音楽は一般にほとんど知られていないジャンルだが、広範な宣伝の結果、コンサートには予想以上の聴衆が来場、後日当地紙にコンサートの様子を紹介する記事が出るなど、日本の現代芸術の先進性、創造性を知ってもらう良い機会となった。

●アレクサンドリア日本文化週間(2003年2月22日～28日)

カイロ事務所では、アレクサンドリア芸術センターの協力を得て、同市内において展示会、映画上映、コンサートなどの催しを集めた「日本文化週間」を開催した。一週間の会期中、生け花、日本文化遺産写真パネルおよび民芸品などの展示を行なうとともに、アラビア語字幕付日本映画の上映会を毎晩開催して計6作品を紹介した。また、オープニングの夜には、日本人の率いる「ジャパニーズ・インターナショナル・ウィンド・カルテット」(木管四重奏団)のコンサートが、アレクサンドリアの劇場で行なわれた。

普段日本文化紹介に触れる機会の少なかったアレクサンドリアでは、大きな反響があり、とくに生け花の展示が来場者の関心を集めたほか、日本映画上映会は毎晩立見客や入りきれない来場者が出るほどの人気であった。

アレクサンドリア側の関係者や来場した市民からは、今後も日本文化紹介事業を望む声が多く寄せられ、同市での日本文化紹介におおいに潜在的可能性があることが確認された。



中東日本語教育セミナー

• カイロ大学政治経済学部への客員教授派遣(2003年3月26日～4月2日)

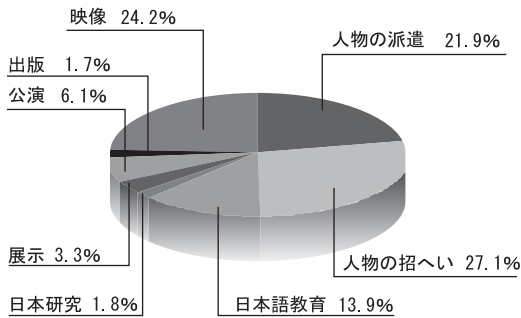
エジプトでは未発達な社会科学分野の日本研究への関心を高めてもらうため、カイロ大学政治経済学部へ学者を派遣し、同学部での講義を企画した。同学部は、将来の外交官や研究者、政策官僚を育てるエリート学部である。とくに今回は、イラク問題で日本批判が生まれている状況下で、日本外交への客観的理解を深めて欲しいとの考えから、日米関係史の専門家である神戸大学助教授箕原俊洋氏を派遣した。箕原氏は、カイロ大学での公開講義で、日本外交史の大きな流れを解説するとともに、現在の日米同盟の意味やイラク問題についても質問に答えて、背景説明と率直な意見を披露した。反米気運が強く、中東の紛争問題では感情的な議論の声の大きい現在のエジプトの大学内で、イラクを巡る問題を含めて日米関係の講義を企画するのは勇気のあることであったが、率直かつ熱心に語りかける箕原氏はエジプト側に歓迎され、実りの多い交流事業となった。「率直な議論が聞けて良かった」との感想が多く寄せられ、とくに若い学生達は、講義終了後箕原氏を囲んでなおも話を聞いたが、同氏の質の高い講義に強い印象と影響を受けたようであった。また、講義の内容は当地の新聞にも概要が掲載された。



カイロ大学アジア研究センターでのシンポジウム

アフリカ

概要



事業費合計
9,500万円

今年度の対アフリカ(北アフリカ除く)事業実績は9,500万円であった。人物交流事業が全体的に減少したことが要因として挙げられる。

アフリカ地域における文化事業は、生け花のデモンストレーションをスーダンで行ない、ケニア、セネガル、南アフリカの3か国では、津軽三味線の公演を実施した。映像分野では、南アフリカ、ウガンダ、ケニアにおける日本映画祭が各地で好評を博した。

日本語教育事業では、アフリカ地域で初めての日本語教育巡回セミナーをマダガスカル、ケニアで行ない、日本語教師に初級会話の教授法、視聴覚教材の利用法について講義し、また日本語教師間のネットワーク形成に貢献した。